566-39-(7)
1200501514822
566
39

蘇峰 德富猪一郎著

蘇峰叢書
第七册

關東採勝記

東京 民友社 發行

蘇峰叢書
第七册

關東探勝記

昭和三年一月一日

566-39

關東の景は概して平凡だ、然も他の及ぶ可らざるところは、其の平凡に存する。

* * * * * * *

山水の勝景と云へば、兎角奇々、怪々の山岳、絶谷、險峽、大瀑布、急流等を擧ぐ。此れも必ずしも不可ならず、されど此れのみが勝景なりと云ふは、餘りに素人臭き眼孔だ。

* * * * * * *

淡泊の中に滋味がある、平易の裡に情趣がある。眞に天然を愛するものには、武藏野の一木の茅にも、其の愛著措く能は

ざる所以を見出さずにはゐられない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

但だ關東の平凡なる風景を、美化する第一と云はんより、殆んど唯一の要素は、富士山だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

或は富士山の爲めに、狹き日本が愈よ狹くなつたと云ひ。或は富士山の爲めに、其の附近の民は、氣象や、氣候の影響を受けて、經濟的に少からず當惑するなどと云ふものがある。如何なる物事にも、苦情の種は絶ゆるものでない。されど富士は日本に於ける最大一の國寶である。昔から三國一の富士

の山と云ふ、此の三國は相模、駿河、甲斐、でなく、日本、支那、印度を意味してゐる。そは何れにもせよ、日本の國民性の一半は、富士山によりて作られたと云ふも、餘りに誇張の言ではあるまい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

但だ富士及び其の周邊に就ては、既に『名山遊記』がある。而して本書に揭錄す可くして、其の紙幅に制限せられて割愛したるもの、尙ほ少くない。そは他日の機會に於て、讀者諸君と相見るであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世上或は予の紀行文を見て、一年大半旅程に暮す者であるかの如く想ふ君子がある。されど予は世間的では閑人であるが、業務的には忙人だ。一年中の計畫は、殆んど鐵道の時間表の如く、切り盛りせられて、寸毫の餘裕がない。然も其の中から、寸閑を偷んで、遊行するものであれば、多くは日還り、左なくば一二泊に過ぎない。從て悠々光景に流連し、烟霞に寢食するが如きは、殆んど其例が少ない。されど古人の云うた通りに、『偷閑氣味勝長閑』である。這裡の消息は、少くも予と同一の環境に在る人士にして、始めて與に語ることが出來るであらう。

昭和三年十一月初一

大森山王草堂に於て

蘇峰六十六叟

蘇峰叢書
第七册

關東探勝記

目次

野州小遊記……一
一枝庵の由來、一枝庵開場式、佐久山より雲巖寺、黑羽より鹽原、鹽の湯より那須に至る、那須より大森まで

毛信遊記……二三
上野から中の條、四萬溫泉、四萬より草津、草津雜言、草津見物、歷史上に於ける草津、草津より輕井澤へ、輕井澤より妙義、妙義より東京

川越遊記……五〇

菅谷及び慈光寺……五七
菅谷、所謂る畠山館址、畠山重忠、新長瀞と鎌形八幡社、慈光寺、榮朝師及び國寶、名譽ある慈光寺

安行の苗圃……七四

目次

長瀞遊記……七九
雪見の講演……八五
水戸遊記……八八
上野から水戸、水戸より大洗、大洗より常磐公園、彰考館、水戸より太田、太田より瑞龍山、義公の西山
水戸義公三百年祭……一一六
助川、水戸から長岡、長岡より水戸、彰考館瞥見記
筑波遊記……一二六
筑波神社、雨中の登山、筑波と富士、筑波と隆光僧正、小田城と北畠親房、極樂寺、八田知家寄進の古鐘
房州二日記……一四五
保田と日本寺、船形觀音と國分寺、國分寺より白濱、白濱、外房と内房、白濱より天津、清澄寺、清澄寺と日蓮上人、星巖五月蘇峰二日
弘安古鐘の行衛……一六九

總房遊記……一七一
東京より佐原、佐原より銚子、犬吠岬から銚子、銚子より白濱、白濱より館山、鷹島、沖之島、館山より大森
偸閑の一日……一八九
我孫子小遊
相模川上流遊記……一九六
相模國分寺遊記……二〇二
相模中郡の探古……二一二
平塚及び其附近、太田道灌の墓、上糟屋から日向の藥師堂、日向靈山寺藥師堂、藥師堂の由來、三の宮比々多明神、善波峠を踰ゆ

蘇峰叢書
第七册

關東採勝記

野州小遊記

一　一枝庵の由來

野州佐久山より拜啓。

昨廿五日（大正十三年十月）一枝庵開場式に參列の爲め、午前八時上野發にて、同行六人出掛た。御客側吾等夫妻、五女盛子、並木淺峰君、主人側青木藤作君、及び其の令息。

青木君は『國民之友』以來、卽ち赤坂榎坂町時代からの知音だ。迂濶なる予は、只だ君が篤志の地方青年たるを知りたるばかりにて、其他を知らなかつた。然も

君が肥料商として成功し、芝伊皿子に住し、相州秋谷に別邸を構へ、佐久山の本邸は固より、氏家、西那須野等、各所に多くの支店あることを知つたのは、近年の事だ。予の知らぬも、迂濶に相違ないが、君が自己を吹聽しなかつたことも、興つて責任がある。君は質實剛健、その物の如く、今尙ほ詰襟の洋服に、長靴をはき、飛び廻はつてゐる。然も毎度手栽の花卉を惠まるゝを見れば、其の心中には、綽々餘閑があるらしく思はる。

昨年の震災には、青木君や、常州太田の小林君の爲めに、米や其他の贈物に預り、一家漸く當座の困窮を凌ぐを得た。小林君は不幸今春逝いた、青木君は固より舊に倍して健在だ。此から一枝庵の謂はれを語るであらう。

震災後、予は直ちに逗子老龍庵より徒歩大森に還つた。當時大森草堂新築中にて、家族は附近の家に賃居した。家族の多き割に家は狹く、大の男三人が、六疊の部屋に、枕を聯べて寢る有樣であつた。故に附近の並木淺峰君と相談し、取り敢へず、青山草堂から運び來れる古材をもて、龜の子山に、容膝の小屋を構へた。其の要領は、其の屋當面の桁に、大正癸亥九月初四著手、初六落成、初七、初八室內整理、初八使用始。工事費十七圓半、蘇峰老人時歳六十又一、一枝庵と書いて置いた。

昨年九月八日から、予は毎朝此處にて、修史の課程を了し、毎日の接客や、用務を辨じ、且つ讀書し、偃息した。一間半に二間の面積だ。卓二つ、書棚一つ、椅子三脚、籐の長椅子一個。外に花瓶が卓上にあつた。壁は老妻が古新聞にて張つた。粧飾としては、只だ予が當時自作の詩二首を認めて、之を屋根下の板に糊したる迄だ。鴨長明の方丈室も、此程の殺風景ではなかつたであらう。

庵は龜の子山の一偶に在つた。山と云ふも、山ではなく、小丘で、恐らくは古墳らしく思はる。其の畔には老松三株、宛も光琳の畫の如く、多年の風雪に矯められて、自然の趣を作してゐた。予は出社以外には、此の小庵に籠りて、且つ書

さ、且つ讀み、且つ思うた。國民新聞復興の企圖も、半は此の小庵の裡より出で來りたりと云ふも、過言ではあるまい。

本年二月、新築の略ぼ出來上らんとするや、家族相催ほして之に移つた。此に於てか是庵の處分が問題となつた。問題と云へば大層だが、兎も角も取り毀はして薪とするなり、放棄するなりせねばならなかつた。折しも青木君來訪せられ、遂ひに之を君の佐久山本邸に移すことに相談が纏つた。青木君から云へば、予から貰ひ受けたのであるが、予から云へば、貰つていたゞいたのである。やがて解體し、火中に葬らる可き一枝庵が、斯く嫁入先きを得たのは、何たる仕合せであらう。

青木君が、自から大工を引き連れ、一切の舊形を失はぬ樣、之を解きて佐久山に運んだのは、本年の三月頃であつたらう。而して其の移轉落成式には、予等も亦た案内せらるゝ約束が、やがて成り立つた。されば此行は久しき以前からの約束を、履行するに過ぎなかつた。然も此際に擧行せられたのは、一は鹽原の秋色を賞するに、最好の時節の爲め、一は過日突發したる家庭の不幸—兒萬熊の病死—を慰藉せらるゝ爲めであらう。予等は君が不言中の深き心入れを感謝して、欣然此行を偕にした。（大正十三年十月廿六日午前四時半、佐久山青木氏邸の新室に於て。）

二　一枝庵開場式

連日の惡天氣にて、雨を覺悟した。然も二十四日は、天氣豫報を裏切て好晴であつた。二十五日も亦た然りだ。否な近來に比類なき好晴であつた。浦和や、小山や、宇都宮にては、吾が社中や、社友諸君の迎接に暇なかつた。隨處の柿實は紅丸累々、花よりも艶。

氏家驛にて下車し、直ちに青木君の支店にて、肥料の標本等を見物した。昔は肥料と云へば、北海道の干鰯、鰊の類に限つたが。今は支那の油粕や、豆粕や、智利の硝石や、印度の骨粉や、其他アンモニヤや、燐酸や、窒素肥料や、あらゆる

科學的肥料が出で來つた。

此れから勝山城址に赴いた。此處は鬼怒川に臨む高崖にて、嘗て大演習に際し、明治天皇の御野立の地である。城址一面翠檜森々、川に臨むの芝生には、可憐の野花、未だ全く凋まず。而して俯して川を臨めば、秋水明澈　香魚の一群、頻りに水底に於て、銀刀を翻へしつゝあり。廣き河原を隔てゝ、對岸に羽黑山を望む。秋光遠近無し、眼の觸るゝ處、悉く詩境ならざるはなし。此處にて青木君の用意の午餐の饗應に預つた。眞に好個のピクニックであつた。

此から瀧澤氏の邸を訪うた。瀧澤氏の王父喜平治翁は、貴族院議員たり。而して地方事業に頗る功績あつた。現代の主人亦た其志を紹ぎ、獨力裁縫女學校を經營しつゝあり。瀧澤氏の庭、紅葉錦の如し。其の壁間の疎林外史の山水大幅、亦た淸賞に堪ふ。喜平治翁の好事なる、書畫古器物の藏儲少からず。殊に驚く可きは考古學の資料たる、土中物の夥多なることだ。曲玉には、逸物あり。石棒、板碑、土器、石器の類、枚擧に遑あらず。予等は覺えず亡兒を想起せざるを得なかつた。此處にて氏子總代諸君の爲めに、八坂神社の額を書し。轉じて裁縫女學校に赴き、青木君、及び予一場の挨拶をなし。沿道の秋色を賞して、喜連川に赴き、龍光院にて足利尊氏の像を見、小學校にて、諸有志と會談し。佐久山青木君の邸に入りたるは、四時頃であつた。

やがて一枝庵開場式は行はれた。青木君及び予の挨拶。それから佐久山町長、其他附近の諸有志の祝辭があつて、薄暮に首尾能く了つた。一枝庵の內外を見れば、故主人は見知らぬ程に、立派に出來上つてゐた。一枝庵にして靈あらば、其所を得たるを感謝するであらう。室內には予の著作や、又た原稿の若干が藏儲せられてある。他日予の魂魄の一片も、恐らくは此處にあるであらう。

佐久山に來り、當地及び附近諸有志に面會し、實に國民新聞愛讀者の多きと、其の精讀者の少からざるとに驚く。而して今更らながら、操觚者の責任の輕からざ

るを、自覺するを禁じる能はず。

青木君は全家總動員にて、予等を迎られた。而して君は廿四日の半夜、佐久山より東京に赴き、廿五日の早朝、再び東京より予等を伴ひ來りたれば、徹夜であつたは、疑ふ迄もない。而じて晩餐は令夫人が、東京より來りて、自から辯せられた。而して其の令孃等が、給仕を勗められた。其の家庭の教訓の行屆きたる、以て知る可し。特に予等を迎ふ可く、新室を築造せられたるに至りては、滿面の慚惶謝するに辭なし。一夜安眠、曉起此文を草した。

（大正十三年十月廿六日午前五時半、佐久山青木氏邸に於て。）

三　佐久山より雲巖寺

十月廿六日、曉空拭ふが如く、曉星金剛石に似たり。屋瓦の上微霜を見る。所謂る日本晴の好天氣、昨日に比して、一層好し。

朝餐前、一枝庵の板額や、學校、寺院、及び東道の主人青木家、其他の爲めに、若干揮毫す。墨濃、紙佳、頗る快適。古人の筆墨佳良、人生の一樂の語、吾を欺かず。午前九時半、青木夫人及び佐久山諸有志と相別れ、一路大田原に向ふ。同行八人、青木君、令息、令孃、我等三人、並木君、及び宇都宮國民新聞支局の三原君、石塚君也。

箒川を渡り大田原に至る。此邊奥州街道也。大田原にて諸有志、少年團等に迎へられ、相伴うて大神宮祠に詣す。石段數十級を登る、上に平坦の地あり。老杉森森、天を刺す。而して間ふるに櫻樹を以てす。下は蛇尾川に臨む。那須、高原の諸山脈、一々指點す可し。社務所に於て、清茶を喫し、官民諸有志と相語る。民間有志家中には、大鹽君、綿貫君等、我が國民新聞の愛讀者あり。神官手塚君書を求む『滿目秋光好』の五字を書す。

此れより蛇尾川を渡る。道は那須平原を貫く、而して那須山の噴烟は碧空に直上してゐる。山脈歷々、秋毫辨ず可し。川西町に至り、那珂川に沿うて下り、湯

津上村なる那須國造碑を見る。先年攝政宮殿下の行啓にて、新道出來たり。碑は今や一個の神祠化してゐる。保存の爲めには、尤も然る可し。此碑の由來は、今まだ茲に說く迄もなし、持統天皇三年—或は文武天皇四年と云ふ—の建立にして、日本內地三古碑の一、其の寶重す可きは勿論也。元祿年間水戶義公が、特に碑亭を設け、守戶を措かれたる、寔とに深人淺事なしと申す可し。

此れから五六町隔りたる車塚の一を見る。此れは義公が、國造碑に關係ある人の墓ならんとて、發啓せられたが。唯だ古鏡や、陶器や、刀劍の類のみにて、墓誌を得なかつたから。その儘再び埋め、更らに古塚保存の爲め、其の周圍に、松を植ゑて置いたと云ふことである。

再び大田原に引き返し、那珂川を渡り、黑羽町を經て、雲巖寺に赴く。途中道路開鑿の爲めに、難場あり。纔かに四五間の處であるが、とても自動車は通行し難し。唯だ賴ひに臼井那須郡長等の厚意にて、兎や角曲乘りして、通行出來た。雲巖寺は實に山の奧の又た奧にて、恰も越前の永平寺に赴きたる心地す。境內幽寂、老杉鬱々、溪に架したる朱欄の大鼓橋を渡り、胸を衝く程の石級を上りて、方丈に至る。方丈は嶺の半腹に在り、其上翠杉一團をなし、背景を作る。

開山の高峰顯日和尙、卽ち佛國禪師は、後嵯峨天皇の皇子にして、佛光國師の高足だ。如何に國師が禪師に傾倒したかは、佛光錄を讀みたる者の知る所。弟子が師を慕ふより以上に、師は弟子を慕うた。而して佛國の高足が、卽ち夢窓國師である。上に佛光あり、下に夢窓あり。善き師と、善き弟子とを持たる佛國禪師は、何たる果報者ぞ。三峰の中、高峰尤も高しとは云はぬ。されど三峰巋然、實に佛敎界の偉觀である。

我等は十一時半に、此處に至る可き豫定であつたが、既に二時を過ぎた。乃ち佛國禪師の墳に、一瓣の香を捧げ、輪藏を見、更らに開山塔を禮し、禪師の生けるが如き英偉の肖像を拜し、和尙と大鼓橋の袂にて相別れ、歸途に就いた。

（大正十三年十月廿七日午前五時、鹽原鹽の湯太古館にて、溪聲を聞きつゝ認む。）

四　黑羽より鹽原

雲巖寺より再び黑羽に引き返し、大雄寺に至れば、少年團は喇叭を吹奏して、我等を先導した。是には聊か恐縮した。此寺は青木君とは舊緣あり、此處にて午餐の豫定であつた。勿論辨當は持參して來た。然るに和尙、內室の好意にて、御馳走して待ち受けて居られた。非常なる盛饌にて、是亦た恐縮であつた。一行は何れも二十世紀には見たことがなき程の、大なる塗膳にて、特に予には梨子地蒔繪の膳を備へられた。此れは德川家の某御姬樣の召上りたる膳とか承り、今更ら箸を把るにも踟躕したが、古人の晩食以て肉に當つるばかりでなく、三時頃の午餐、特に大雄寺內室の心入れの手料理とて、何れも無遠慮に頂戴した。青木君の語る所によれば、大雄寺內室は長野出身にて、國民新聞の愛讀者たり。青木君より以上に、我等に就ても、知つてゐる由、今更ら驚くばかりであつた。

壁には東皐心越と、鐵牛機和尙との書畫が、多く揭げてあつた。此の兩和尙は、如何なる逆緣にや、生前には仲惡であつたが、此處には相並んでゐた。聞けば鐵牛和尙は、黑羽の殿樣大關家の歸依厚く、爲めに此地にも小菴を設けあつたと云ふ。亦た當地の有志菊池君の所藏にかゝる、水戶の人見卜幽の家に傳へたる、四個の卷子を見た。其の二卷は卜幽の古稀を賀するもの、他の一は當時諸名家の詩艸、而して他の一卷は、全部光圀卿の卜幽に與へたる書牘、詩稿の類であつた。最後の一卷、最も珍重す可きは云ふ迄もなし。

黑羽を出づる時は、既に四時に近つた。此れから一氣呵成に、大田原に引き返し、石林なる乃木神社に詣した。社司中村君等は待ち受けてゐられた。先づ榊を捧げ、社務所にて、將軍の遺品を見た。人生一死難し、將軍の如きは、眞に好く死所を得たるもの。中村君の需に應じて『生爲忠義臣、死爲護國神』と書した。實は文字の妥當からすれば、死して護國の鬼と爲ると書く可きであるが、

此の場合は神と書かねばならぬと考へ、故らに斯く書いた。參道一帶の櫻樹、霜を帶びて、花よりも紅であつた。落日蕭森、灝氣人に迫る、眞に將軍の威靈、我を去る遠からざるを覺えた。

此れから一氣松方農場に赴いた。此の農場は、海東老公の、心血の注ぐ所、遺愛中の遺愛である。公は恒に人に向て、那須農場の經營を誇說せられた。先年皇后陛下行啓の際には、特に電報もて予を招かれた。然も予は他行中にて、厚意に辜負した。老公の生前に見舞ふ能はなかつたのは、予の太だ遺憾とした所、然も今公爵の時に於て、之を見舞ふの機會を得たるは、如何にも欣幸の次第である。

先年英國にあるの際、曾て某貴族の邸内を馳驅した。松方農場に入りての氣持が、恰も此れだ。老公の造林せられたる檜は、槍の柄の如く、亭々として直立してゐる。邸邊に近けば、紅楓、青松相接し、羊は點々として芝生に遊び、白鳥は濯々として池に戲る。人生の至樂、何物か之に若かむ。

現公爵、及び公爵夫人、令孃の迎接を忝うし、榾火の火爐に溫まりつゝ、小話し、茶菓の饗應を忝うした。殊に農場にて出來た甘藷を、熟灰にて燒きたる、別して珍味であつた。予は實に多年、老公の親厚なる誘誨を忝うしたるもの、一念老公に至る毎に、涙潸々たらざるはなし。然も今や現公爵一家、此地に在りて、老公の遺意を奉じ、風塵の外、質素の生活を事とせらるゝを見る。感慨更らに深し。

日は全く昏れた。此れから關谷、大網、福渡戸、鹽釜を經て、鹽の湯なる太古館に著したのは、實に六時二十分であつた。豫定は六時であつたが、僅かに二十分遲れたのみだ。然も途中の光景は、全く暗中摸索、水聲以外には、何物もなかつた。唯だ幾度か斷崖や、巖角に接觸して、魂を冷し、魄を悸れしむるのみだ。身紅楓の中にありて、紅楓を見ず。是亦た一奇。（大正十三年十月廿七日午前五時四十分。因に云ふ、三原、石塚の二君は、昨午後西那須野より宇都宮に還つた。故に一行七人となつた。）

五　鹽の湯より那須に至る

十月廿七日、鹽原の最奥なる鹽の湯、太古館の樓上に於て、端坐原稿を認め、天明を竢つ。昨夜來只だ溪聲を聞くのみにて、固より其の光景の如何をば、想像だもする能はなかつた。

天漸く明けた、戸を排して、實に驚いた。眼界の及ぶ所、溪を挾む兩崖の山々、一として紅々、黄々ならざるはなし。必らずしも楓樹と云はず、凡そ常綠樹以外は、何れも皆な秋色を帶ばざるはなし。眞に奇觀だ。人往々鹽原の勝を說く、然も都人士は、中途の福渡戸を以て、終點として此地に及ばず。予等は青木君が、故らに此地迄誘ひ來りたるの、偶然ならざるを感謝した。

廿七日は、實に珍らしき霜であつた。厚き氷さへ張つた、霜柱が立つた。されば一夜の中に、滿山の紅樹、黄葉は見頃となつた。

昨夜嚴霜墜。　溪山錦作レ堆。　欲レ窮ニ溪上路一。

唯見白雲來。

此れが實況だ。幽賞未だ已まず、館の主人の爲めに、此作を書して與へた。而して午前九時半、昨夜の路を、歸途に就いた。鹽原小學校長秋元君が、案内役として同行せられた。沿道の光景、昨夜暗中摸索、今日は悠々緩歩しつゝ十二分に、之を觀覽するを得た。

鹽湧橋を渡りて、鹽釜に至り、此れよりは更らに方向を轉じて、會津街道を溯り、畑下戸、門前、古町等を經て、鐘乳洞を見た、見たと云はんよりも、入口にて失敬した。それより踵を回らし、門前の妙雲寺を訪ひ、秋元校長の小學校を訪ひ、清茶を一喫し、再び鹽釜に還りて、昨夜の道を逆行して、福渡戸の松屋にて中食した。沿道の光景は、彼是れ云ふだけが野暮である。昨夜の嚴霜にて、單に木葉を染めたのみならず、亦た木葉を落しつゝある。風なきに紅葉が、空より舞ひ下るの情趣は、何と申す可き乎。福渡戸の主人、書を求めた。乃ち所見を錄し、

て與へた。

蹈盡鹽溪北又南。　不レ知何處結ニ茅菴一。
秋氣蕭森群壑靜。　紅葉無レ風點ニ碧潭一。

此れから又た沿道の勝を探りつゝ、西那須野停車場に至り、青木氏店員諸氏の迎接に預り、やがて黒磯行の汽車に乘り、黒磯にて下車したのは、午後五時十五分頃であつた。それから那須溫泉迄、四里餘の路を、約二十五分にて、一氣呵成に馳せ上つた。日は沈み、風は冷かに、寂寞たる曠野、殆んど人影を見ず。車は只だ那須の噴烟を見當に、ひた奔りに奔つた。

山樂園に投宿した。見る間に、冷霧は四周を蔽ひ、殆んど室中を襲はんとした。爲めに炭を燒き、どてら二枚宛を累ねた。浴場の設備、食事等、何れも遺憾なかつた。遺憾なるは、只だ電燈の暗らき事、故に今朝は五十燭の電燈の下、二本の大なる蠟燭を點じて、此稿を認めた。（大正十三年十月廿八日午前五時四十分、那須溫泉山樂園の樓上に於て。）

六　那須より大森まで

十月廿八日、前日の霜晴は、やがて今朝の陰曇となつた。入浴一次、新那須山樂園を發して、那須湯元に赴いた。紅葉は既に十分を過ぎた。恐らくは數日前が見頃であつたらう。

我等は大なる楢の林の中を貫きて、那須溫泉神社に詣した。此れは延喜式神名帳に掲げたる下野十一社中の古社である。時に雨點兩三、面を掠めて降つた。楢の林は、櫟や、槲の林よりも、寧ろ黄葉の風情に饒んでゐる。櫟や、槲の葉に比すれば、楢の葉は、何となく柔味ありて、潤ひがある。順序から云へば、秋の黄葉は、楢を第一とし、櫟を第二とし、槲を第三とし、其他槻や、楡や、山毛欅や、椋の類を、第四位とせねばなるまい。

此れから崖を下りて、有名なる殺生石を見た。此邊毒霧、瘴烟、久しく居り難

し。所謂る有毒瓦斯は、時々刻々、地中より噴出しつゝある。石の傍には、芭蕉翁の句として、

飛ぶものは雲ばかりなり石の上

とある。併し今は鳥も飛んでゐる樣だ。但だ大正十一年には、殺生石を莫迦にして、一人の壯者、此に近き斃れ、其父之を見て、救はんと欲して、亦た斃れ、父子同所に死したる旅客ありとて、其の人名を柵外に記しあつた。

再び新那須に下つた。晴日には、此邊の展望、尤も壯大、空濶の由にて、常陸日立銅山の大烟筒さへ、肉眼にて見ゆると云ふ。左もある可し。此れから黑磯に至り、自動車にて、三島街道を、西那須野迄馳せた。大道坦々砥の如く、其の直さこと矢の如しとは、宛も此の道路の爲めに、設けたる言葉であらう。三島街道と云ふは、宇都宮より、白川迄、故三島通庸君が、開鑿したる道路である。三島君の功罪論は、他日に讓り、誰しも那須原野の開拓に就ては、斯人の力を、認めない譯には參るまい。

西那須野にて、先づ故大山公の墳に謁し、大山農場にて、主任水野君の案内にて、其の農場を一覽した。記者は少壯時代、屢ば大山元帥と相見た。元帥は外茫漠として、内實に精緻。其の智には及ぶ可く、其愚には及ぶ可らずとは、蓋し元帥のことであらう。而して元帥は、薩人中、尤も進歩主義者にして、記者の如きも、親しく其說を聞き、屢ば意外の感をなした。現公爵柏君は、考古學に於て、亡兒萬熊と相ひ契合する所あり。現に數日前、倫敦より萬熊當の『ストーン・ヘンジ』の繪葉書を寄せられた。

大山農場は、其の規模に於て、松方農場の比ではない。松方農場は、一千六百六十一町歩餘と稱し、大山農場は二百七十三町歩餘と稱す。されど大も小も、那須野の原での問題である。我等の眼には、大山農場内を、自動車にて馳せつゝ、何となく無限、無際の感があつた。先公尤も櫻樹を愛せられたと見え、隨處櫻樹多

く、何れも拱をなしつゝある。而して葉櫻の淺絳、更らに花と競ふに足る。誰か櫻に春秋の眺めあるを知らん哉。

大山農場誇りの一は、牛乳である。我等は雨を衝いて、牛舍を見舞うた。其の乳牛は何れもホルスタインの良種で、斑白の色をなし、其の毛の色澤塗るが如く、拭ふに似たり。我等は此行三日、此の牛乳の惠に浴した。實に甘美にして、北海道以外には、未だ味ひ得たる例なき程のものであつた。

斯くて西那須野なる青木君の支店にて、午餐の馳走を受けた。青木夫人は、佐久山から、此處迄故らに出張して迎へ、且つ送られた。而して午後一時二十七分の急行にて、歸途に就き、而して四時半には上野に著いた。

此日は朝より雨にて、上野に著く頃は大降りとなり、大森に著く頃は土沙降りとなつた。我等の荷物は、今や往く時に四倍した。青木君と並木君とは、一切其の宰領に任せられた。

此行四日。遊覽の三日は、日一日毎に、快晴を加へた。後の歸路の一日は雨であつた。如何に我等が遊運の强かつたよ。而して青木君が、始終東道の主人として、一切の事を辨じ、毫毛遺憾なきこと、今更ら冥加の至りとも、何とも謝す可き言葉がない。而して並木淺峰君が、青木君の參謀長となりて、恒に主客の便宜を謀られたとも、亦た多しとす可し。第一の仕合せは、宴會攻を免かれたる事。第二の仕合せは、揮毫攻めを免れたる事。第三の仕合せは、演說の强請を免れたる事。而して第四の仕合せは、我が國民新聞に理解ある愛讀者諸君と、會合するを得たる事であつた。而して是れ一に青木君の、注意深き周旋の賜物であつた。

（大正十三年十月廿九日午前六時、大森山王艸堂に於て。）

毛信遊記

一　上野から中の條

近世日本國民史の第二十七冊文政天保時代も、既に脱稿した。此れから天保改革篇、卽ち水野越前守の幕府最後の改革に、取り掛からねばならぬ。此の機會に、上毛から信州へ拔け、數日の漫遊を試む可く、出立したのは、大正十五年八月十一日の朝であつた。

午前七時四十分、上野發沼田行の汽車に乘つた。汽車の殘暑堪へ難く、その爲め過日米國友人サイッ君が贈り來つた其の近著、(THE DREADFUL DECADE)の三分一ばかりを讀んだ。此れは一八六九年――一八七九年間、米國の側面的暗黑史と云ふ可きもの。フィスク、及びグルドの一章の如き、如何に米國の成金者が、惡辣手段もて、金贏けをなしたるとを指摘して、轉た痛快を極めてゐる。

サイッ君は、曾て『紐育ウォルド』に於ける重要なる位地を占めてゐた。されど其の仕事は、寧ろ經營方面であつたらしい。然も其の筆鋒は頗る犀利だ。牛の涎の如く、だら〳〵しないのは、何より氣持がよい。的に是れ新聞記者の文。

新前橋驛から前橋支局長根岸君が、百忙中の一閑を割いて、同行せられたのは、如何にも心外千萬であつたが、然も嬉しかつた。君とは長き友達だ。偶然にもせよ、相拉へて遊ぶとは、何寄りの事だ。

予は久々にて赤城山に見參した。少壯時代には、屢ば上毛に遊び、赤城山とは舊知だ。彼が其の兩翼を張り、山の裾が長く延びつゝ、儼然として聳えたる樣は、榛名や、妙義も、叩頭せねばならぬ。王者と云ふ能はずんば、少くとも覇者の如き姿がある。

自動車にて澁川から中の條迄は、吾妻川に沿うて溯る。吾妻川は白根山の硫黃の爲めに、其の水に漬されたる石は、何れも澁色をなしてゐる。澁川の名も、此れから出で來つたものではあるまい乎。水至つて清ければ、魚棲まずと云ふが、水に鑛毒が交れば、魚は棲まない。

大氣は乾燥して、頭の輕きを覺えたが、然も自動車上の炎熱には、聊か閉口した。

此邊滿地桑ならざるはなし。道傍の民家には、だりや、おゐらん草、向日葵などが、隨處に咲いてゐる。山百合は見受けないと云へば、彼方にあると、同乘者は指點した。併しそれはほんの稀有であつた。或は時節が既に後れたのでもあらう。

二　四萬溫泉

中の條は草津と、四萬との分岐點だ。予等は先づ四萬に赴く可く、自動車會社に立寄り、電話にて旅館に掛合うたが、最初の二旅館から、何れもおあひにくさまを喰つた。三回目に漸く入室の許可を得た。四萬の繁昌想ふ可しだ。

此れから四萬川に沿うて溯る。水はとても清淨だ。道は嶮ならざるも、勾配を上り、山の中へ中へと上りて行く。上には維石巖々たる山があり、下には清湍雪を噴く流れがある。途中の光景も、自から詩興が湧く、併し殘暑の照りつけには、とてもたまらない。

予等が四萬の元湯鍾壽館に投じ、東京からの塵埃を、其の溫泉に洗ひ流したのが、午後二時過ぎであつた。沼田行の緩行汽車を咎むる勿れ。午前六時半に大森山王草堂を發したのが、二時半前には、既に上毛萬山の中なる、四萬溫泉の湯坪の中に、困脚を伸してゐるではない乎。汽車は勿論だが、自動車の惠澤多し。吾人はフォード翁に向て、三拜九拜せねばならぬ。

主人の好意にて、明けて吳れた部屋なれば、苦情を云ふ可き理由はない。但だ西日が一杯にさし込み、とても居る可らず。されば浴後四萬川の左岸を溯りて、一里弱の日向見に赴いた。

此處には浴戸兩三軒の外、茶店がある。予等は先づ特別保護建造物なる藥師堂を見た。此れは茅屋根にて、其上に千木がある。其の廣さは田舍の辻堂程のもの、二間四方に過ぎざる可し。

予等は茶屋の二階に上りて、名物の粽を喫した。何やら場所柄不相應、其の顏に白粉を塗りたる女出で來りて、名物の蕎麥は如何にと勸めたが、思ひ止つた。而

して喫し剰しの粽をば、手巾に包みて携へ還つた。

此邊は何となく、深山の心地がした。而して其の道傍の花にも、秋の色がほの見えた。姑らく道傍の芝の上に仰臥して、天を眺めた。古人の『仰看浮雲白』と云うたのは、此事であらう。

歸途は四萬川の右岸を下り、荒湯を貫いて還つた。荒湯は新湯であらう。然も今や繁昌は、元湯よりも却て此處にあるかの如く思はれた。斯くて我等は河畔を徘徊し、西日が予等の部屋を去りたるを見すまして還つた。

鍾壽館の主人は、國民新聞の愛讀者のみならず、拙著の愛讀者だと云ふ。さなくば予等は此處でも謝絶せられたかも知れない。今や四萬の元湯、荒湯の双方には、殆んど二千に垂んとする客が、入り込んでゐると云ふ。併し部屋は雜沓しても、四境は靜寂だ。

予等は蟲聲と水聲との外には、何物をも耳にしない。黄昏空に蚊の如く飛ぶものあるを見て、大森の蚊よりも、四萬の蚊は大なりと思うたが、そは赤蜻蛉であつた。蚊帳もなく、窓戸も閉さない。河には河鹿が啼く、岸邊には鈴蟲が啼く、溪聲は固より廣長舌を弄してゐる。山は我が額を壓せんばかりに、近く高く聳えてゐる。その家と山との間から、天の川やら、群星が、爛々として碧天に輝いてゐる。

半夜夢醒めて、左の一首を得た。

對岸孤燈滅復明。　晨星落落夏山横。
覺醒塵土十年夢。　半是蟲聲半水聲。

（大正十五年八月十二日午前五時、四萬鍾壽館七十二號室電燈下に於て。）

三　四萬より草津

八月十二日、四萬溫泉に於て、早起、障子を明れば、山氣凄凉、都門十月の候に似たり。午前八時前二十分發す。鍾壽館主人は、本來敎育家であり、待客の道

も、頗るさつぱりしてゐる。實に氣持善き宿であつた。

予等は四里の道を、一氣に下り、中の條に至り、四萬自動車會社に憩うた。草津より迎の自動車の來著を待ち兼ね、此處より車を仕立て、途中出會を期待して出發した。

道は吾妻川に沿うて溯る。隨處に桑麻多し。一里にして原町を過ぎ、やがて岩島村にかゝる時に、草津からの自動車に出會し、互ひに合圖をなして、行き過ぎた。豫定の如く、予等は車から降り、賃銀を拂ひ、草津側の車に乘り移らんと道傍の樹蔭に立つた。されど彼是半時間餘待つも、我等の車は去つたが、草津側の車は來らない。

餘儀なく根岸君は車を迎ひに行たが、中々還らない。予もたまりかねて行たが、漸く根岸君と出會して、其の延引の事情を詳にした。實は予等が爲めに、昨日草津から中の條迄迎ひに來りたる車が、予等が草津行を一日延ばして、四萬に赴いた爲め、原町に留つてゐたから、義理にも其車に我等を乘せねばならぬ、仕末になつた爲めと云ふ。卽ち一日の日程のくるひは、一時間の待ちぼうけを以て、酬いられねばならぬ仕末だ。

此處は麻の產地とて、畠には麻多く、道傍の農家の前には、麻幹を乾しつゝあるものが多い。而して往々小發電所を見る。此れは村營と云ふ、吾妻川の水力を利用したるものだ。邊地却て這般の便宜多し。人間乘除の哲學は、隨處に應用せられつゝある。

頭上の山は、悉く奇峰と云うではないが、往々巨巖削り成すが如く、其の頂に松や雜木が生じてゐる。脚下は清湍石と相激して駛りてゆく。道は好景の代償として、嶮惡と云ふ程ではないが、決して佳良とは云へない。斯くて川原湯を左方に眺めて行く。此邊からが關東の小耶馬溪と云ふ由なるが、必らずしも耶馬溪などゝ、他の名を模倣するにも及ぶまい。但だ我等は危崖絕壁の上を行く爲め

に、其の好景を思ふ程に賞するとが出來ない。然も其の水勢は、耶馬溪のそれに比して、寧ろ多きかと思ふ。岩石は概して火山の作用にて成る、凝塊岩かと見受けた。

但だ此の羊腸九折の阪を登りつゝある時、予があぶないと聲をかけた一刹那、上へから自動車が突如として現はれ來つた。今ま一歩を過れば、予等の自動車は、少くとも絶壁の下に墜落する筈であつた。併し責任は、双方にある。斯る曲折多き阪路を、互ひに警響を發せずして行き合うた、覿面の懲罪と云はねばなるまい。

此れから長野原を過ぎ、洞口にかゝる。道は愈よ險になつた。自動車は猛獸の怒るが如く、道面と相ひ撲ち、吼え且つ號びつゝゆく。峠を過ぐれば、吾社中條通信員齋藤君は、道傍に立つて待つてゐた。峠を上りつむれば、一望廣原、遙かに淺間の烟りと、白根の高峰とを望んだ。予等は卽に四千數百尺の高地に在る。運動茶屋にて、草津の諸有志と相見、これより草津に至り、望雲館の別邸に入つたのは、正午に近かつた。此日も好天氣、昨日にました好天氣。草津にて八十五六度であれば、都門の殘暑は思ひやらるゝ。

（大正十五年八月十三日午前五時半、草津望雲館別邸にて。）

四　草津雜言

草津では諸有志に向て、古文書一覽を需めたが、實は其の土地は甚だ舊ひが、舊記の徵す可きは、甚だ多くない樣だ。此れは火災の故でもあらう。但だ望雲館主人の武田文書は、永祿十二年附にて、草津附近の者共の訴訟によりて、一年中、或は期間を限り、外來浴客を禁止すると、日新館主人の文祿四年附の、豐太閤草津へ入浴準備書付と、而して光泉寺住職の携へ示したる、天正十五年附の近衞龍山公の、草津に於ける雜詠などは、先づ見る可きものであらう。

草津では、源頼朝が、建久四年八月、淺間の狩りの時に入浴したる時を溫泉の紀元とし、その湯が今の御座湯であると云ふが、予の考では、恐らくはそれよ

りも頗る以前の事であらう。光泉寺では行基菩薩が、草津溫泉の發見者であると云ふが、或はそれが事實に近きかも知れないと思ふ。

草津は實に溫泉王國である。其湯は隨處に、泉の如く湧き出しつゝある。其の沸沸、滾々の勢、いと凄まじきものがある。硫酸類を含有する最も多ければ、其の尋常の水でなきことは、如何なる蒙昧の者でも、一見して別つを得る。

されば草津溫泉は、最初の人類が、此地に棲息したる時に、既に發見して、其の惠澤に浴したものであらう。言ひ換ふれば、有史以前、先住民族が、發見して利用してゐたものと推定するも、間違あるまい。然も先住民族に先ち。人類に近き猿猴の類や、人類に遠き蛇蝮の類が、既に之を發見してゐたかも知れない。

話は別道に赴くが、四萬溫泉の先なる日向見の湯の、又其の先に蝮の湯がある。それは蛇の入浴場で、多くの蛇蝮類が湯治に出掛くると云ふ話がある。溫泉の發見者が、何れも病傷の禽獸類であるは、各地溫泉場の口碑に傳ふる所だ。

予は從來草津が、花柳病者や、癩病患者の定住所であるかの如く、考へてゐた。然るに先年來田中青山伯が、屢ば此の地に來遊せらるゝを知り、必らず此地は一種の靈境である可しと思うた。青山伯は、其の土地の撰定に、一隻眼を有してゐらるゝ。

今ま親しく此地に遊んで、實に青山伯が、此地を愛する所以を知つた。豈に啻だ病者と云はん哉。無病息災の予等と雖も、此地に遊ぶを樂まざるを得ざるものがある。それは四千二百尺の高原、北を塞ぎ、南を開らき、人間別に一天地を作しつゝある。草津が其の溫泉の宣傳の爲めに、唯だ前記兩病者の天國の如く思はれたのは、恐らくは草津に取りて、難有迷惑であらう。

（大正十五年八月十四日午前五時、妙義菱屋に於て。）

五　草津見物

八月十二日、日脚漸く傾く。乃ち望雲館主、日新館主など案内して、草津の共

合湯を見物す。湯歌を謠うて、裸體の大男等が、隊をなし、板もて湯坪をかき廻しつゝある樣は、如何にも面白い。斯くして彼等は號令の下に、一齊に百二十五六度の湯坪に躍り込む。

予等は又た湯の花採收場を見る。そは宛も海水を天日に乾して、鹽を製すると同一方法だ。熱湯が木樋を傳うて注ぐや、其の一面湯の花堆をなしつゝあり。そは鹽の如く白からず、硫黄の如く黄なり。それを掻き集め、湯の花として、東京其他の地方に輸出せらる。

それから予等は田中青山伯の別邸撰定地を見た。此邊の大氣清澄、而して一方に萩や、女郎花や、撫子の咲くあれば、他方には蕨がある。此れは固より晩生のものであらうが、隨處未だ拳を開かざるものがある。それより琴平神社に參詣し、穴守稲荷の勸請所に至り、賽の河原に下りて、沸々たる溫泉の水に和して、河をなしつゝ流るゝを見る。斯くて極樂亭に休憩し、主人と小話した。

極樂亭とは、青山老伯が命名したものと云ふ。主人富永七郎氏は、國民新聞の愛讀者にして、先年予が田中伯の寶珠莊を訪うたる紀事の如きは、氏自から謄寫してゐる。而して氏は予が草津に於ける、青山老伯に寄せたる書翰を、老伯より請受けて、之を額面に仕立て、儲藏してゐる。

此れから白根神社に詣し、草津の鳥瞰圖を一覽し、賴朝の浴したと稱する白旗の湯を見、光泉寺に抵り、其の蟲干の藏書を視、薄暮歸宿す。夜は又た齋藤君に誘はれて、湯町の夜分の光景を見物し、樂燒屋にて、若干の拙筆を揮うた。斯くて歸宿すれば、向側の旅館にては、其の大廣間にて、人々群がり、浪華節や、劍舞など、盛んに行はれてゐる。其の吟聲やら、劍舞の仕樣やら、日比野雷風の孫弟子かと思はれた。之に對して山陽の笛聲ならざるも、坐ろに雷風の死を悼むの情に禁へなかつた。

根岸君は、此の騷ぎにて、一夜安眠を得なかつたさうだが、予は何もかも打ち忘

れ、快眠を貪つた。草津の諸君が、折角の歡迎會も、我儘にて辭退し、講演や揮毫の煩累もなく、此の如くして快眠が出來ねば、罰が當る。

（大正十五年八月十四日午前九時半、妙義菱屋に於て。）

六　歴史上に於ける草津

草津は歴史的に面白き地だ。源頼朝の三原の狩から、此地に入浴したと云ふは、口碑以外に、文献の徴す可きものがない。足利時代に於ては、堯惠の北國紀行には、白井から此處に至れる記事がある。又た永正六年柴屋宗長が、東路のつとに、九月十二日、草津につきぬとの文句があり、此處にて連歌を興行し、又た文龜三年には、宗長が、其師宗祇を奉じて、暫らく此の地に湯治した。而して永祿年間には、越後上杉氏の軍が、白根峠を越え、此の地から關東に出でたことがあつた。

斯る出來事以外に、草津を騒がしたるは、文祿四年秀吉が、草津溫泉入浴の準備であつた。其の顚末は、淺野文書に詳細記載せられたれば、今ま茲に掲ぐるを省くが、兎に角秀吉は、

三月十五日御立なされ候間、成二其意一、三月廿五日より内に、悉出來候樣に可二申付一候也。

文祿四年正月三日

御普請奉行

淺野左京大夫どのへ

千石越前守どのへ

石川兵助どのへ

〔秀吉朱印〕

と申付けた。千石は仙石秀久だ。

斯くて秀吉は、其の御座所の建造のみならず、彼が滯在中、其の周邊の守護を、それ〴〵然る可き大名共に命じた。

併しそれはほんの空ら騷ぎに止つて、秀吉の草津湯治は、沙汰止みとなつた。若し秀吉をして來らしめば、必らず之を悔いなかつたであらう。此の溫泉王國が、天下の英雄秀吉を迎へ得なかつたのは、返す〳〵も殘念だ。

草津は眞田氏が信州に於ける上田と、上州に於ける沼田との衝略に當りてゐる。眞田氏は上州の長野原から妻戀、鳥居峠を經て、上田に至るを順路とした。而して草津は長野原と、妻戀との中間からすれば、聊か傍に寄つてはゐるが、先づ中間と云ふも、差支あるまい。

今日でも草津は殆んど別天地の觀がある。されど今や電車は、輕井澤驛から省線に連絡し、既に妻戀まで通じてゐる。而して數日中には前口迄通じ、今年の晩秋には、草津迄全通す可く、今や草津に於ける停車場も出來上りてゐる。されば其の完成の日は、此の別天地をして、更らに東京と汽車、電車にて、寸地を蹈まず、往來するを得せしむるととなる。

草津の全盛期は、文化、文政頃であつたらしい。上州草津道中膝栗毛の中にも、彌次郎北八の草津宿の一節が掲げられた。此れは東海道の草津でなく、上州の草津だ。

湯宿の繁昌云ふばかりなく、中にも湯本安兵衞、黑岩忠右衞門など、ことに家居花麗を盡し、風流の貴客絶へず云々。

とある。此の湯本の後が日新館、黑岩の後が、予等の宿所望雲館と思はる。惟ふに電車開通の後は、必らず文化文政の昔を恢復するであらう。それにしても土地の人々が、能く遠人を厚待し、旅客と共に其利を均うし、其樂を偕にするが肝要であらう。

七　草津より輕井澤へ

八月十三日、午前七時草津出立。武藤代議士等と相別る。代議士は予の宿と筋向の旅館にあり。偶然邂逅、去るに臨み君の令息は、チョコレート一罐を惠まれた。

此方から何等の手土産も携へず、浴客の武藤君令息から、秘藏の菓子を捲き上ぐ、思へば罪深き業なれども、令息としては大功德也。予は此の一鑵を袖にして、勇氣百倍した。六十尙ほ稚心ありとは、此事歟。

自動車は石津原を過ぎて妻戀驛に到る。途中女郎花、桔梗、今を盛りと咲き誇つてゐる。妻戀では、出車時間、尙ほ一時間弱あれば、附近の瀨戸の瀧を見物した。

電車は四千尺から三千尺の間を上下しつゝあるが、炎熱は酷だし。中條通信員齋藤君は、予等に淺間山の押出しを案內す可く、地藏川まで同行した。電車は淺間山に向つて行く。路は高原の上にて、或は懸崖となり、或は嶺の脊となり、或は澗を廻り、或は樺林の中を過ぐ。樹間に於ては、鶯の啼くを聞き、原上にては桔梗や、女郎花、擬寶珠、撫子、其他無數の秋花の咲き揃うたるを見る。

鐵路如レ蛇縈二嶺巔一。　秋花歷亂共爭レ妍。
車窓忽轉樺林外。　當面淺間萬丈烟。

地藏川にて下車した。豫期の自動車は在らず、疲れたる馬車を倩うて行く。熱沙の上を、馬夫は馬車を挽きつゝ行く。牛步も之に及かず。予等は次回の電車に間に合せねばならぬから、氣が氣ではない。

漸く途中にて自動車に出會し、拜み倒さんばかりに相談し、漸く之に乘りて、所謂る押出しに至つた。此れは天明年間、淺間山の爆發に際し、鎔岩が中腹より押し出して、一種の鎔岩の溪谷を成したるもの。此の炎天に鎔巖の上を行步するは、とても堪へ難ければ、予等は其の側から遙拜した。

此の地藏川方面は、別莊村として、一時は隆盛の運に向うたが、先年淺間山鳴動の爲めに、聊か其の出鼻を折られた姿となつてゐる。併し隨處に大小の別莊がある。淺間山下の高原にて、定めて棲み心地は善からむ。清水も混々として流れてゐる。押出し附近は、矮松のみであるが、地藏川驛の周邊には、楢の巨木も、處處にある。落葉松には適してゐると云ふ。

予等は豫期の如く、次回の電車に間に合ひ、此處にて齋藤君と相別れ、輕井澤驛に向うた。車中詩あり。

青春意氣冒天關。　幾對火峰開我顏。
愧被山靈笑頑骨。　江湖牢落老塵寰。

明治十五年七月、新島先生と淺間山下を過ぐるや、作あり。

突兀孤峰衝碧蒼。　群山以外勢飛揚。
問君有底不平事。　噴出烟炎萬丈長。

又た明治三十二年十一月、山路愛山と、淺間山下を過ぐるや、作あり。

唐松葉爛飽霜風。　千曲川原一望中。
矯首淺間山色好。　孤烟直上入秋空。

今や重ねて淺間山と相見る。山は依然萬丈の烟を噴いてゐる。而して我は白髮老書生、遑々如として江湖に奔走す。所謂る笑止千萬とは此事であらう。

八　輕井澤より妙義

予は新鹿澤湯に、守屋女史を見舞ふ豫定であつた。昨年も女史は予等夫妻を案内し呉れた。されど聞けば中々の山奥との事にて、遂ひに失敬した。而して輕井澤驛にて汽車を待ち受け、磯部驛に下車し、それからやつと怪しげなる自動車を倩ひ、途中パンクはせずやと心配しつゝ、漸く妙義の菱屋に著したのは、八月十三日午後五時頃だ。

十三日の午後は、輕井澤驛の寒暖計は、九十度を示してゐた。其の暑さ知る可しだ。妙義には何の爲めに來つた乎。決して石門を見る爲めでない、妙義の勝を探る爲めでもない。但だ予等が東京移住の初期、未だ國民新聞發刊以前、明治二十一年か二年の頃、我が兩親や、亡友人見氏など、妙義に避暑に滯在したとがあつた。さればその記憶を新たにす可く、便道此地に來つたのだ。相並んだ二軒の旅館の一軒は、既に桑圃となつてゐるが、他の一軒の菱屋は、依然として舊に仍り

て在る。其の泉水の緋鯉さへも、當時のそれではあるまいが、依然泳いでゐる。先づ樓上から見渡せば、碓氷、甘樂の平野は、一望眼下に開いてゐる。而して其の屋後から、屋側は、妙義名物の老杉や、若杉が、相ひ簇擁してゐる。

兎も角も一浴して、一杯と云ふ可きだが、予等は飲を解せず、番茶を酒の代りに、したたか喫した。やがて密雲は釀し來つた。遠雷は轟いた、電は閃いた。而して驟雨は來つた。電燈は滅した。

殘熱烘ㇾ人蟬語哀。　白雲山下暮雲回。
定知天狗鼓ニ雄翼一。　鳴動老杉雷雨來。

此れが掛値なき卽景。

予等は提灯の火にて、喫飯をした。本日は草津を出てから、午饗の暇さへなければ、所謂る晩食以て肉に當つるの喩通り、甘かつた。特に意外にも、鏑川にて漁れたる鮎の鹽燒などは、別して忝けなかつた。而して晩凉は、雷雨と與に生じ、予等は滿身の清籟の裡に、斯遊最終の夢を結んだ。

誰でも同樣であるが、夏の敵は蚊である。然るに今回は四萬と云ひ、草津と云ひ、何れも無蚊國だ。妙義では蚊帳を釣つたが、そはホンの形式的に過ぎなかつた。是亦た無蚊國土の一片だ。

九　妙義より東京

八月十四日は、這回の旅行中、尤も愉快にして、且つ安靜なる朝であつた。予は妙義の養氣館〔菱屋〕の樓上にて、昨來の原稿を認めた。凉風は簾を動かした。四顧皆な翠色、白雲山上、一點の雲がない。蟬は群動に先つて、旣に鳴き初めた。

予は茶を喫する暇もなく、泉筆を走らせた。

朝餐後妙義神社に參詣した。此の神社の寶物は、域內の老杉だ。中にも大杉稻荷と云ふは、其の周圍四丈幾尺にて、幾株の杉が、相ひ抱合して一樹の形をなしてゐる。而して神社本殿の側にある神木の老杉は、二丈有餘にして、亭々天を

衝いてゐる。社領八萬坪、概して杉の森である。汎神論者でない予も、此に至りて、杉その物が、神であるが如く感ぜられた。

妙義神社は、其の資格は、鄕社だが、其の結構も莊嚴にして、とても國幣社以下とは思はれない。但だ何等古文書、舊記の徵す可きものなきを遺憾とする。見る可きものは、唯だ公辨法親王の筆、妙義大權現の額の類のみ。

社內に兒島高德奉納と稱する歌碑と、燈籠がある。その燈籠には、應安五年の字がある。されど應安は北朝の年號だ。南朝の忠臣たる兒島高德が、北朝の年號を用ひたとは、ちと受取り難い話だ。

予等は午後磯部に出で、高崎にて、根岸國民新聞前橋支局長と相ひ別れ、同夜八時過ぎ大森草堂に歸つた。此行根岸君の周旋に負ふ所、少くなかつた。多用なる君は、其の餘閑を偸み、予の爲めに案內者となつて吳れた。而して君に尤も、多しとするは、揮毫、宴會等を、一切理り切つたとだ。

即今は山が繁昌だ。當世は猫も杓子も、山だ山だと騷ぎ廻つてゐる。併し此れも生活の目先を變ふる爲めには、妙ならずとせずだ。

此際宮殿下方の、御旅行に就て、警官其他の心配が、同情に禁へない。宮殿下方も、金枝玉葉とは申せ、我等草野の者同樣、御旅行あらせらるゝは、御尤千萬の事だ。此には決して何等の苦情はない。唯だ其の御出入、御經過に就て、警官の物々敷警衞振りが、如何にも警官其人に對して、同情に禁へない。予は或る場所にて、警官に、餘りに物々敷警戒振りは、宮殿下方にも、御迷惑ではあるまい乎と申した。然も警官は曰く、若し萬一の事あらば、是れ我等の重責だ。我等尙ほ可なり、長上官の責任を如何せんと。記者も斯る言葉には、何とも返事の致し樣がない。（大正十五年八月）

川越遊記

本年の夏は、餘りに多事に取り紛れ、逗子老龍庵にさへ赴く機會を失うた。賴ひ秋季皇靈祭日を利用し、川越に遊ばんとて、並木、高橋二君を誘うた。妻兒亦た從ふ。一行五人、午前八時十五分池袋を發し、膝折驛に至つた。

天氣豫報の通り、朝は曇つた。汽車は膝折驛に駐りて、一切動かない。聽けば前路に、先發の汽車が顚覆して動けないと云ふ。そこで是非行ける所迄は行き、それから徒歩聯絡を取りたいと、乘客は談判したが、要領を得ない。斯くて高橋君などは手を戟にして、大聲叱咤したが、驛員も動かず、汽車も動かない。或る紳士は――定めて洋行歸りであらう――伊太利鐵道の例などを引證して、驛員の不親切を責めたが、一切利き目がなかつた。雨は一點二點降り出した。斯くて汽車は再び池袋迄却走した。高橋君の談判にて、汽車賃だけは、仕合せに取り戻した。

池袋驛で自動車を搜したが、彼是一時間弱も、此處彼處を彷徨した。漸く途中往來の自動車を要し、それに飛び乘り、川越仙波の喜多院にたどり著いたのは、午後一時過ぎであつた。

東道の主岸素亭君や、吾社通信員の新井君抔は、汽車の故障を聞き何れの方角より我等の來るかを測定し、大宮方面から電車で來るであらうとて、久しく其の停車場に待ち居られたる由。其他有志諸君を煩はしたると多かつた樣だ、如何にも心外千萬であつた。

喜多院の中庭には秋海棠が、其の前栽には萩が、何れも滿開であつた。巨大なる垂枝櫻には蟬が哀吟し、庫裏の一室には、謠曲の稽古最中であつた。

追々諸有志の方々に面會し、例の狩野昌庵吉信の筆と稱する國寶、職人繪盡屏風を見た。繪は二十四枚、每枚吉信の朱印が、其の一隅に捺してある。三代將軍の

誕生間を移したと稱する一間には、其の小襖や、壁には水墨にて、瀟湘八景や、其他の風景畫があり、其の合天井と、杉戸には、花卉麗毛の類が、鮮彩もて圖せられてゐる。其の眞否は詳にしないが、何れも探幽と傳へられてゐる。職人繪盡しは、繪畫として、其の前後に類多きが、然も當時の生活情態を、徵する手引としては、此繪はその時代の風俗其儘を描きたるものにて、自から特色がある。

岸君等の案内にて、喜多院の境内を徑して、東照宮に詣した。此處の東照宮は、規模は大ではないが、寛永年間の建築にて、後水尾天皇の勅額、『東照大權現宮』には、寛永十年十二月廿四日とある。石手水鉢には、寛永十四丁丑年佐久間右近將監奉献の文字が、彫られてある。而して兩側に駢ぶ燈籠には、何れも歴代川越城主の姓名が彫ってある。中にも柳澤吉保のが、尤も目に著く。

東照宮參拜もさることながら、實は其の拜殿に掲げられたる、三十六歌仙の額面拜觀が目的であつた。賴ひに社司の好意にて、飽く迄近いて、賞心を充たすを得たのは、何たる眼福であらう。

前回――大正三年五月十日――一見したが、近眼の者が遠方から眺めたので、何が何やら十分判斷がつかなかつた。其の畫風は如何にも、德川初期の隆運を兆す豐滿、渾厚の趣がある。而して其の肖像何れも頰は肥え、顎は延びて、一個の寒乞相を現はさない。

社司の好意にて、其の裏面をも拜觀した。柿本人麿のには、『繪師岩佐又兵衞尉勝以圖』との長銘が、朱漆もて描かれてあり、且つ其の文字も、何となく刀銘の如く、氣持が好い。他に今一面、同銘がある。其餘は『勝以圖』の三字のみに止る。

此れも勿論國寶である。

轉じて老いたる樫や、椎や、杉の間を歩して、慈眼堂に詣し、天海僧正の肖像を見る。其の自刻と稱するが、何れにしても予の思ひなしかは知らねど、餘りに理智が勝つて、とても溫乎たる德容、藹如たる盛貌と云ふ譯には參らない。如何に

も殊勝には出來てゐるが、何となく冷峭の氣が人を襲ふ心地がする。

堂後の諸碑は、尤も好し。慈眼大師碑は、寛永二十年十月二日とありて、光海、胤海の建つる所、此れは堂々たる大碑である。又た其側に天海の乳母と稱する、長壽院殿の碑がある。元和六年十二月十五日と記してゐる。兩碑共に文字俗ならず、特に長壽院殿の書法を、尤も妙とする。

又た二大板碑がある。一は暦應五年、他は延文三年、何れも南北朝時代のもの。

尙ほ他に尊海上人の塔があるが、地震の際顚倒して、今尙ほ其儘に委して在る。

それから樓門の下に釣されたる、正安二年の銘ある銅鐘を見たが、暗くして其の銘字を讀む能はなかつた。

時間に限りあれば圖書館に赴き、發掘したる、採拾したる、考古學諸資料を見た。

此れは同行の末子武雄の爲めに、殊に示されたるものであつた。又た綾部氏が其の祖先と稱する柿本人麿の木像や、其の系圖を携へ來りて示された。若干の鄕土史料をも見た。斯くて市役所に赴き、市長武田君に面會し、學校庭に於ける、酒井家來封以後、川越に相傳したる獅子舞を見た。此れは頗る單調ではあるが、亦た古雅であつた。此れはやがて明治神宮に奉納する由にて、今は其の豫習最中であつた。

轉じて河越重賴の墓に詣す可く、養壽院に赴いた。重賴は坂東八平氏の一にて、河越重賴は、畠山重忠の親族、而して彼の女は、義經の正室であつた。彼の墓と稱するものには、只だ天を衝く老樅樹がある。而して其の附近に、有緣、無緣の墓石が累々として、狼藉してゐる。この石を集むれば、小城の築造は容易であらう。中には若干の板碑をも見受けた。

養壽院には、亦た文應元年の古鐘がある。賴ひに鐘樓に上りて、其の文字も摩挲して見た。

新日吉山王宮

奉鑄推鐘一口長三尺五寸

大檀那平朝臣經重

大勸進阿闍梨圓慶

文應元年大歳庚申十一月廿一日　鑄師　丹治久友　大江眞重

如何にも結構のものだ。

書院にて茶を喫し、住吉具慶の堀川夜討のまくり、又た光悦の筆と稱する、三十六歌仙などを見、轉じて秋元家以來の御茶屋に赴き、郊村の秋色を賞し、五時過ぎ川越鐵道にて、所澤國分寺を經由し、東京驛に迂回して、山王草堂に歸つた。武藏野の光景は、何時見ても飽かぬ眺めであつた。

萬熊の舊友住田君は、東京迄同行した。岸君、早川助役、橋本君、大川君、綾部君等、始終案内の勞を取られ、特に岸君の周旋に負ふ所多大であつた。川越は如何にも落附のある町だ。予等は好き印象を携へて還つた。

此行快心の第一は、演說攻、揮毫攻、宴會攻等を、一切拔きにしたる事であつた。汽車の事故にて、午前の三四時間を徒費したるも、諸君の無駄なき案内にて、それを償うて餘りあつた。併し時間の間違の爲めに、案内者諸君を、空腹攻にしたることは恐縮千萬であつた。予等は自動車中にて、用意の辨當を喫したれば、固より其の心配は無つたが。（大正十四年九月廿四日　山王草堂に於て。）

菅谷及び慈光寺

一　菅　谷

昭和二年九月十一日、中秋明月の翌朝、秋晴に乘じて、菅谷及び慈光寺邊を逍遙

した。今ま其の概略を語るであらう。

汽車は午前七時三十五分に、池袋から、概して大根畑を貫いて行く。田は未だ色付かざるも、穗は何れも出で揃ひ、何となく豐稔の氣分が漂ふ。桑は晩秋蠶の爲めに、今尙ほ大部分生ひ茂りてゐる。

一行は修史室の高橋君、史料編纂の勝野君、川越から岸君、林君など。何れも此の方面には、それぞれの知識である。汽車の窓から指點して、此處の杜は、古墳であるとか、彼處の小高き地點は、古城址であるとか、此處は古戰場とか、彼處は鎌倉街道だとか、それ〴〵說明を聞いて、菅谷驛に著いたのは、午前九時過ぎであつた。

菅谷驛は舊鎌倉街道の宿驛にて、畠山重忠の別邸の在つた所だ。吾妻鏡にも、畠山重忠が、二俣川にて討死する際には、菅谷の館から出發したるとを記してゐる。

重忠去十九日〔元久二年六月〕出二於小衾郡菅谷館一。

云々とある。

菅谷は畠山氏の所領の一部にして、其の本館は大里郡木畠村にあつた。然も菅谷は、鎌倉街道の要衝にして、其の別館を、此處に設けたのであらう。

今ま漆桶萬里の梅花無盡藏を讀めば、彼は長亨戊申〔二年〕八月十四日、武藏なる江戸城を發し、白子里に宿し、十五夜の明月を、豐田武庸の第にて賞し、十六日の晩間には、越生山の龍隱精舍に入り、十七日には須賀谷〔菅谷〕の小平澤山に入りて、太田源六資康の軍營を、明王堂畔に訪うてゐる。

二三十騎、突出して余を迎ふ、余亦た深泥の中鞍を解く。各々其面を拜し、資康の恙無きを賀すと。

其詩に曰く、

明王堂畔問二君軍一。　雨後深泥似レ度レ雲。
馬足未レ臨草吹レ血。　細看要レ作二戰場文一。

とある。而して其の註に曰く、

六月十八日、須賀谷、兩上杉戰死者七百餘員、馬も亦た數百疋と。

此にて足利中期以降も、此地は依然要衝であつたことが判知る。

看來れば此邊は赤土にて、詩人萬里も、雨後の旅行には、閉口したであらう。但だ我等は泥乾いて未だ塵を揚げず、仕合であつた。

二　所謂る畠山館址

菅谷停車場には、岩澤村長、宮崎、高橋兩小學校長、山岸郵便局長、其他有志諸君出迎られた。中には國民新聞初號からの愛讀者、服部嘉正氏などもあつた。

而して直ちに所謂る畠山重忠館と稱する邊に案内せられた。

山岸君は、熱誠なる畠山重忠の崇拜者である。其の遺跡の保存に、凡有る力を竭してゐる。君は眼前に横る鎭守の杜を指點して、既に此杜は伐採に決せんとしたが、先生の老樹愛護說を援いて、私から懇談して、漸く助かつたと云うた。此れは、重忠には關係なき事だ。

畠山館址とするものは、其の規模宏大にして、一の丸、二の丸、三の丸迄、其の堡壘、其の塹濠なども、殆んど嚴存してゐる。試みに鎌倉なる賴朝館址などと對照するに、とても比較にならない程宏大だ。

されば此れは戰國時代に、改築したるものと見る可きであらう。一體の模樣は、築城が餘程發達したる後の營造であらうと思はる。されど之を畠山重忠の菅谷館の址と認定するも、大體に於ては差支あるまい。其の附近の地勢から見ても、假令ひ館の原形を失うたとするも、地點は此を距る遠くなかつたのであらう。

山岸君は、其の小高き所に、紀念碑を建て、其の碑下には、畠山氏に關係あり、緣古ある各地から、其の土塊を收拾して之を埋めたと云ふことだ。而して別に又た重忠の祠堂をも、自費もて營んでゐる。

塹濠には、或所には水草が生じてゐる。或所には桑圃となりてゐる。或は楮が植

附てある。土壘は蜒々として連りてゐる。其の城樓の跡は、何れも高く且つ平坦になりてゐる。

而して其の附近に、極めて近世的なる忠魂碑が築造せられてゐる。此れは二十七八年、三十七八年役の、忠勇の士の魂を弔ふ所だ。

我等は其の碑側の槻川に枕したる、倶樂部樣の建物にて小憩し、山岸君から城跡圖に由りて、説明を聞き、且つ其の需に應じて、紀念帖に署名した。而して特に『時艱憶古雄』の五字を題した。

畠山重忠は、關東武士中の花とも云ふ可き人物だ。彼の死は、全く其罪でなかつた。其の寃罪であつたことは、北條義時でさへも、能く之を知つてゐた。吾妻鏡は、彼の爲めに、春秋の筆鋒を揮うてゐる。

三　畠山重忠

畠山氏は、桓武天皇の孫高望王の裔にして、武藏の大族たる村岡黨、若しくは秩父黨の本統だ。平氏ではあるが、源家とは由緣が多かつた。高望王の子良文、良文が武藏の村岡に居て、忠頼を生んだ。忠頼は村岡二郎と稱した。其子將常が武藏守となり、武基を生んだ。武基は秋父別黨と稱して、武綱を生んだ。武綱は源頼義に從ひ、奥州戰爭に功があつた。

武綱の子が重綱、重綱は下野權守武藏留守所總檢校となり、秩父權守と稱した。重綱の子重弘、重弘の子重能は、畠山庄司となり、三浦義明の女を娶りて、重忠を生んだ。重能は源義平に從ひ、源義賢を大藏に攻めて功があつた。然も彼は源家零落、平家繁昌の世の中には、自餘の關東武士同樣、平家の家人となりて、京都に勤番した。

頼朝の兵を起すに際し、重能及び其弟小山田有重は、京都に在つた。平家では重能の一門共が、頼朝に應ぜんとを虞れて重能を拘留した。當時重忠は十七歳の青春であつたが、父の爲めに心ならずも、平家の徵發に應じて、兵を率ゐ、金江川

に屯した。金江川は、大磯と平塚の間を流るゝ花水川のことだ。

而して偶然三浦氏の兵と接觸した。三浦氏は重忠母の家であり、双方調停を相談中、事の行違から、小坪で戰うた。小坪は鎌倉と逗子の間なる海村だ。

畠山重忠は、武勇を尙ぶ時代に於ても、取り分け武勇の士であつた。而して其の膂力の卓絶したることは、一般驚嘆の標的であつた。されどそれよりも有り難きは、彼が其功に伐らず、其の武勇を濫用せず、恬淡寡慾にして、情に濃かに、義に殉へたことだ。

賴朝は人を使ふに、其能と賢とを以てした。梶原景時などは、其の能を以て、頗る信寵を博したが、然も賴朝は、死に抵る迄、重忠を重んじ且つ愛した。

重忠が二俣川にて、無實の咎にて、北條方の寄手に打たれたのは、四十二歳であつた。

重忠は音樂にも堪能であつた。栂尾の明慧上人とも、道交を契んだ。彼は濟々たる關東武士の中に於て、別樣の光輝を放つた。

四　新長瀞と鎌形八幡社

我等は燬くが如き秋暑に、汗をだく〳〵流しつゝ、所謂る新長瀞に赴いた。此處は槻川の急轉して激流となり、更らに縈廻して、碧潭となりてゐる幽境だ。

川を挾んで赤松の林がある。巨巖怪石、相簇擁したる中を貫いて、槻川は流れつゝある。水底分明、遊魚數ふ可し。

我等は板橋を渡りて、向岸のバラック式の水に臨める亭子の上に座し、凉を納れた。此處にては川の小鮮や、甘藷の天ぷらの馳走にて、午餐に有り付いた。給仕は皆腕節逞ましき大の男達であつた。一滴の酒なく、半人の女性なく、所謂る此れが風流ならざる所、也た風流と云ふ可きであらう。

村社の八幡神社の齋藤社司は、社寶たる掛佛二個、及び慈光寺大般若經卷等を携へ示された。掛佛中の貞和四戊子年七月日大工兼恭とあるものは、特に珍重す

可きものらしく見受けた。同行の林君は、社司の許可を得て、拓本を取つた。

大般若經は、慈光寺國寶の一部にして、國寶指定以前逸出したるものであらう。平安朝の經卷として、其の書體の優美、遒麗、尤も愛す可く、然も其の跋文は、具足してゐる。

無二災殃一而不レ消。無二福樂一而不レ成者、般若之金言、眞空之妙典、被レ稱二諸佛之父母、聖賢之師範一也。所以至誠奉レ寫二大般若經一部六百卷一。三世大覺、十方賢聖、咸共證明。我現當レ之。勝願必定成就。貞觀十三年歳次辛卯三月三日己酉檀主前上野國權大目、從六位下安倍朝臣小水磨。

此れより慈光寺に赴く可く、途中八幡神社に參拜した。此れは只今は村社であるが、其の域内には老杉林立し、如何にも神々しく覺ゆ。而して所謂る木曾義仲產湯の清水なるものにて漱いだが、支那文士の言葉で云はゞ、其泉清而甘とでも申す可きであらう。御神體は圓頂法服にて念珠等を持せらると聞く。此れは何れの八幡社にも、往々見る所のものと同一であらう。坂上田村麿が、宇佐の神を勸請したものとの傳說にて、舊幕時代には二十石を宛行はれたる由にて、五代將軍常憲院の文書が儼存してゐる。

五　慈光寺

我等は玉川、妙覺の諸邑を過ぎ、秩父往還を爪先上りに上る。路は都幾川の峽谷に傍うて溯る。秋暑人を燬くも、清爽の山氣、自ら快健を覺ゆ。

平村に至れば、土地の諸有志相迎へらる。挨拶もそこ〳〵にして、此から九町の阪を上りて慈光寺に詣するととした。

慈光寺は武藏國に於ける、最も古き由緣ある寺にして、白鳳二年の建立と云ひ傳ふ。先づ一千二百年の歷史を持てゐる古刹だ。一說には開山は鑑眞和上の弟子、持戒第一と稱せられたる道忠和尙にして。而して第二世とも稱す可き圓澄は、武州埼玉郡の產にして、寶龜二年に生れ、十八歳にして道忠和尙に事へたとある。

何れにしても古刹としては、關東第一と云ふ能はずんば、少くとも其の一と云ふ可きものであらう。

一行魚貫して上つた。東京からは五人の同行であつたが、途中からの加入者にて、登山の頃は、見下ろせば殆んど一町もつゞいた。

本來桓武天皇から一千三百町の御寄附がありと云ふ、傳說ある程の大伽藍にして、其中に七十五坊ありたる由にて、途中に幾個處も、其の遺跡と認めらるゝ場所があつた。山は深いが木は左程茂りてゐない。但だ上るに隨ひ、漸次に老杉が林立してゐる。

上る半にして、小平らかなる地點に出づ。此處には大なる菩提樹がある。我等は其蔭に憩うた。而して道傍には大なる板碑が駢び立つてゐる。何れも人の長けよりも高く、又た普通の板碑よりも、厚味が加つてゐる。

それは弘安、德治、元亨、嘉曆、文和、貞治など、鎌倉中季から、足利初期までの物だ。我等は更らに勇を鼓して上つた。やがて鐘が殷々と山上から響き來つた。此れは國寶の鐘が鳴りたるのであつた。

我等は喘ぎつゝ上り來れば、老楓蓊鬱の處、藥師堂の側に、鐘樓があつた。鐘口の徑は二尺九寸、厚さ二寸七分。而して其銘は陽刻にして、鐘面に浮き出してゐる。

奉冶鑄　六尺推鐘一口　銅一千二百斤

天台別院慈光寺

大勸進遍照金剛　琛慶　大工　物部重光

善知識入唐沙門　妙室　願主　權律師法橋上人位榮朝

寛元三年乙巳年五月十八日

洵とに慈光寺に相應の名鐘だ。

六　榮朝師及び國寶

抑も此の名鐘の願主榮朝は、何人である乎。彼は比企郡菅谷郷の生れにして、其の素生は貴種であつたと云ひ傳ふる外に、確證はない。兎も角も彼は顯密二敎を學び、後建仁寺に榮西禪師を訪ひ、唯心宗に就て研究する所あり。入宋三歲、得る所少からず。歸朝の後、慈光寺に住し、而して其の域内に靈山院を創立し、禪の專門道場とした。而して爾後上州世良田に長樂寺を開創し、大に禪敎を弘めた。

我等は更らに鐘樓を過ぎて、方丈に至つた。庭前には巨大なる貝多羅樹がある。此れは慈覺大師の支那から請來したものと云ふ。

寺には七井、七木、七谷、七石など、何れも七の數に因みたる名所名物がある。我等は何よりも先づ七井中の尤も清き、甘き水を、幾杯となく滿喫した。

此の山は坂東四十八個處の札所にて、第九番の觀世音を安置してある。我等は方丈から遙拜もて濟ました。而して我等は山清水にて沸したる湯に浴して、人間の汗を洗ひ去つた。

寺には國寶として、今や大般若經百五十二卷を傳へてゐる。此れは本來六百卷であつたが、散逸して此の如くなつた。其の跋文に鎌形八幡宮に藏したるものによりて、既に記したる通りだ。（參照　鎌形八幡社）併しそれが百五十二卷存してゐるのは、如何にも有り難きことだ。別に阿彌陀經、般若心經二卷、法華經筆記者目錄二卷、法華經一品經三十卷、何れも國寶である。然もそれが悉く博物館に保管せられて、此處にて見るを得なかつたのは、我等のみの失望には止らなかつた。

大般若經だけは、賴ひに其の散逸したる鎌形八幡宮の一卷によりて、如何にそれが見事のものであるかゞ判る。法華經は、何れも經文の軸はなゝこにて、唐艸の高彫、標題も赤銅にて、文字を打出し。紺紙金泥銀泥、白紙墨跡品々ありと云へ

ば、先づ嚴島平家願經の類であらう。其の年代は文永七年十一月廿日記之の文字にて、之を知るに足る。而して其の紛失したる分は、德川氏中期に、それぞれ補寫が出來てゐるさうだ。

七　名譽ある慈光寺

慈光寺が、鎌倉時代に於て、如何に關東に於ける名刹であつたとは、前記の如く、榮朝寄進寛元三年の國寶の鐘にても、分明だ。されどそれよりも昭著なるは、吾妻鏡に於ける、幾多の記事だ。

文治五年六月の項に曰く、

廿九日　丁巳　日來御禮敬愛染王像、被レ送二于武藏國慈光山一、以レ之爲二本尊一。可レ抽二奥州征伐御祈禱一之由、被レ仰二合別當嚴耀、並衆徒等一。當寺者、本自所有御歸依也。去治承三年三月二日、自二伊豆國一遣二御使盛長一、令下鑄二洪鐘一給上。則被レ刻二御署名於件鐘一而云々。

とある。今尙ほ慈光寺には、賴朝寄附と稱する愛染明王像を傳ふるも、その賴朝署名の、治承三年三月二日寄進の鐘は、影もない。

又た文治五年十月の項に曰く、

廿二日　戊申、被レ送二愛染王御供米於慈光寺一。又被レ下二長絹百疋於衆徒之中一。是依二素願所就一也。

此の如く賴朝の奥州征伐の祈禱には、慈光寺は、頗る効驗があつたものとして、祈願主たる賴朝から喜報感謝せられてゐる。

尙ほ建久三年五月の項に、

八日　己卯、法皇四十九日御佛寺、於二南御堂一被レ修レ之、有二百僧供一……僧衆鶴岡廿口、勝長壽院十三口、伊豆山十八口、筥根山十八口、大山寺三口、觀音寺三十口、高麗寺三口、六所宮二口、岩殿寺二口、大倉觀音堂一口、窟堂一口、慈光寺十口、淺草寺三口、眞慈悲寺三口、弓削寺二口、國分寺三口也。

とある、此れにて關東に於ける慈光寺の位地が、略ぼ推察せらる。

何れにもせよ東京から一日往復の距離に、斯る名刹の存在するとは、我が都人士の恐らくは未だ知らざる所であらう。予は自から此の靈境、勝地を知るの晩かりしとを、今更ら悔ゆるの情に禁へない。

前記菅谷の畠山別館の址と共に、紹介したきは、陸軍大佐栗原勇君の近著『畠山重忠』の一冊だ。此れは一般青年の讀本として、他の淫靡鄙猥の惡書流行の世の中には、頗る毛色が異つてゐる。而して栗原君其人も、亦た毛色の異りたる人であらう。頃ろ重忠戰沒の地に、其の祠堂を建造せんと奔走しつゝありと聞く。

（昭和二年九月）

安行の苗圃

大正十五年五月二日、大宮を經由して、埼玉縣の安行に遊んだ。安行は其の附近の戸塚、神根と共に、菓樹、及び觀賞用諸植物の苗圃として、日本全國中に冠たりと云ふ能はずんば、少くとも其の重なる一であらう。

途中の汽車では、獨逸人の男女の合唱や、はしやぎにて、退屈を免れた。大宮では先づ氷川神社に詣して、公園内を散歩した。神池の鯉魚は、舊に仍りて多く、且つ大であつた。

久し振りに來り觀れば、公園の野趣は、殆んど跡形もない。曾て老父母を奉じて、中秋の月を此地に賞し、露繁き武藏野の原にて、蟲の音を聞きて一夜を明かし、翌朝は薄や女郎花を折りて、家づとにしたとを想起し、轉た今昔の感に勝へなかつた。聞けば今は見沼の螢も、殆んど絶え果てゝ、折角の螢見にも、他所より輸入せねばならぬ始末だと云ふ。

大宮にて宇尾野家集古館を見た。壁から天井迄、全家悉く皆な石器、土器の類たらざるはなし。戸口の前には、十五六貫目もあらん石棒が横つてゐた。

大宮から岩槻を迂りて、野田に抵る。一路坦々、薫風五月、面を吹いて寒からず、滿眼の新綠、頗る人に可。岩槻は家康關東移封の際、高力清方に賜ひ、其の城池は、慶長十四年高力忠房によりて營造せられた。爾來城主を替ふる數回、寶曆六年大岡出雲守忠光の所領に歸して、維新の際に至る迄、其の子孫の居城となつた。今は唯だ其の城蹟が、島の如く田畠の間に、高丘を占めて存するを見る。

野田村では、鷺林を見た。五位鷺、青鷺、大白鷺、中白鷺、小白鷺、其他あらゆる鷺が、木と云ふ木、竹と云ふ竹に、鈴なりしてゐる。時宛も交尾の期節にて、其の鳴く聲は、鴉よりも喧し。彼等は春の彼岸に來り、秋の彼岸に去ると云ふが、其の去る所は、何處にや。

此れより大門村を過ぎ、戸塚村に至る。此邊隨處に、苗圃あり、チューリップの花黃々、白々、紅々は、其の葉の青々と相映じ、眞に美觀だ。而して又た躑躅の花、火の如く、錦の如きを見る。

附近に女郎佛と云ふ佛樣あり。花柳病を癒すに靈驗ありとて、參詣者多き由にて、處々に其の道しるべがしてあつた。我等は其所を橫ぎりて、先づ梅の盆栽專門の家を見舞うた。其の代價は一鉢五十錢から、五百圓迄のものがあつた。何よりも眼に附くのは其の數の多きことだ。

梅の盆栽を作るには、先づ杖程の梅を、根元から五六寸の所にて切り去り、それに新芽を吹かするのだ。その新芽を、或は摘み、或は矯め、三年以後に至れば、漸く盆栽らしくなる。其の一年生のものは、如何にも平凡にて、唯だ棒切の先から芽が吹いてゐる迄だ。それが年數を經るに從ひ、枝振り佳き盆栽となるのだ。乃ち梅の大盆栽の如きも、先づ此の通りだ。それは普通の梅樹の幹を、程能き所から切り去り。而して其の幹を更らに剜り、更らに劈き、老幹磊砢の狀を作さしむるものだ。

人間は自然を師とすれども、時としては人間が、自然に勝ることがある。盆栽の

如きは、全く人巧もて、天巧を制したるものゝ一例であらう。

此れから大寶地山の秋元君の園に赴き、其處にて中山村長や、同地の諸有志と相ひ會食した。秋元君は躑躅專門家にて、其の所有の大寶地山は、滿山皆な躑躅だ。然も其の最も得意とするは、皐月にて、其の盆栽數萬。而して其中には新種、名花、甚だ少からずと云ふ。其の名花の『萬歲』と稱するものゝ如きは、二寸內外の一穗が、二十圓にも値ひすると云ふ。而してその穗を指し木として、それより更らに新たなる穗を取り、漸次に蕃殖せしむるものと云ふ。

秋元君邸の露臺よりの眺望は、實に愉快であつた。一望の關東平原、若葉、青葉、は天に連りて、隨處の村落には、五月幟が、片々と風に翻つてゐる。古人は『綠陰幽草勝ニ花時一』と云うたが、然も綠陰幽草と同時に、躑躅は今や滿開だ。秋元君園に命名せんとを需む。予曰く留春なる哉。乃ち口占して曰く、『杜鵑花發好ニ於錦一。爲レ我猶留五月春』と。

轉じて中田君の園を見る。亦た躑躅を專らとし、更らに蘭科の諸植物に及ぶ。而して篠掛樹の如きは、移植八年と云ふが、既に亭々として屋上を凌いでゐる。其の發育の速成驚く可し。

此れより西福寺を訪ひ、元祿年間、家光の息女、尾張大納言光友の夫人、千代姫の献立にかゝると云ふ三重塔を見る。塔亦た佳、然も塔畔の老松は更らに佳。

此れより諸有志に別れ、鳩ケ谷を經、川口より乘車して歸家した。此行吾社の浦和支局長、及び埼玉縣廳の石橋技手の案內にて、得る所少くなかつた。聞く安行及び其の附近にて、苗木、及び盆栽等の業に從ふもの六百餘戶。而して其の苗木は朝鮮、滿洲より日本全國に及び、亦た海外に輸出するものありと云ふ。其の盛大や以て知る可し。（大正十五年五月）

長瀞遊記

六月一日、長瀞に遊ぶ。前日の夕刊に、天氣次第に惡しくなるとの、豫警あつたにも拘らず。

當日は月初めの日曜でもあり、且つ長瀞に直通の汽車が、上野から始めて聯絡せらるるとのことにて、別して車内は雜沓した。熊谷迄は例の如し。此れからが秩父鐵道の線路にて、車は秩父山中に向ひ、荒川の流に沿うて溯り行く。麥は熟し、蠶は恐らく上簇に近きつゝあらむ。桑葉は漸く稀れだ。日恬かに風遲く、首夏の光景、何となく人の心をすがゝせしめた。

小き停車場などには、砂利の堆積するあり。此れは荒川の砂利を東京に運ぶものらしい。今や砂利は、都市經營の一大要素となつてゐる。道路と云はず、建築と云はず、砂利の需用は、日に增し多きを加へ來つた。殊に鐵筋コンクリートの流行する卽今に於ては、別して然りとする。東京では玉川で足らず、荒川や、相模川や、酒匂川や、更らに延いて、函嶺以西大井、天龍にも及びつゝある。

長瀞にて長生館に小憩し、寶登山神社に詣した。家庭圓滿の飯匙を、神官から授けられた。記者には別段その入用を感ぜざれども、或は他に入用の場合あらんと思ふまゝ。與へらるゝに任せ、數個を受領した。誰ぞ入用の方は、申越あれ。

併し此文が新聞に出づる頃は、恐らくは品切れとならむ歟。

神社から長瀞停車場前の、秩父織物陳列館を觀た。秩父銘仙は、今や上州伊勢崎と與に、日本に横綱を張つてゐる。予は秩父絹織物同業組合の理事福島君、及び陳列館主管の村田君より、秩父絹織物に就て、種々面白き話を聞いた。銘仙原料の玉絲は、三州豐橋より上州前橋に送り、前橋より此地に齎らすとぞ。然も其の玉絲原料の玉繭は、秩父方面より豐橋に送るもの少くない。震災以前迄は、秩父織物の得意は、關西に多くして、關東及び東北に少かつたが、震災以來は、其の比例が顚倒した。而して其の產額は、一千萬圓を超え、電力利用の爲め、多々益々辨ずれども、供給超過を慮かりて、今は聊か手控へしつゝありと云ふ。

陳列館には銘仙を主とし、其他秩父大島、上布の類もあり、同行の妻女等は、頻りに陳列棚を漁りつゝあつたが。予は空腹を覺えたれば、相ひ催して長生館に還り、秩父郡選出の縣會議員引間君、及び吾社熊谷通信員梅田君、秩父大宮通信員堅木君などと會食した。六月一日解禁日のことゝて、指の如き鮎五個の鹽燒が出來た。八人の會食には喞か不足であつた。

此れから秩父鐵道社員松崎君に導かれて、荒川の眞中にある白鳥島を眺め、川を隔てゝ、所謂る秩父赤壁を眺め、養浩亭に至り、秩父鑛石標本陳列館を視た。予は今にして、何故に地質學を修めなかつたかを悔いた。此處には秩父郡中から蒐めたる、あらゆる鑛物の標本がある。中にも秩父盆地から發掘したる第三紀に屬する、種々の化石の如きは、素人目にも妙であつた。帆立貝や、牡蠣や、子安貝が、秩父山中の底地から出で來るなどとは、意外と云へば、此程の意外はあるまい。松崎君の語る所によれば、秩父一郡は、實に地質學に關する、天然の標本地帶であると云ふことだ。

養浩亭下より川舟にて、荒川を下つた。所謂る長瀞の赤壁は、原始代の斷層だと云ふ。されば吾人は此の屏風を立て列ねたる如き、幾十丈の削り成せる岩壁を頁として、造化の手によりて書れたる、億萬年前の記錄を、讀むことが出來るのだ。通常の歷史家は云ふも更らなり、考古學者も、人類學者も、此の原始の記錄に對しては、自から呆然たらざるを得ない譯合だ。

予等は流に隨つて下つた。兩岸の新樹は蒼々である、絕壁の間に於ける幽草や、野薔薇や、草花や、水濱の急湍に脛を沒して、竿を搖かす――垂るゝと云はず――鮎釣り翁や、活動寫眞の如く、舟行と共に、移りゆく。而して樹上の幽禽は、水中の河鹿と相和して、歌うてゐる。見るもの、聞くもの、何れか詩料たらざる可き。

荒川の流れは、其名ほどには荒からず。偶ま水石相拍つの難所なきにあらねど、

球磨川、富士川は勿論、保津川程にもない。云はゞ臨危の快感なきと同時に、その心配もない。而して此の清麗珠の如き水が、悠々濁りて流るゝ、隅田川の上流であるとは、誰れかは想ひ及ぶ可き。予等は午後二時頃に舟を放て、寄居町の波久禮驛に著したのは、四時前であつた。

川舟は概して此處迄下りて、これから舟を電車に搭載して、長瀞驛、若しくは其上なる國神驛迄運ぶものなれば、溯川の勞は、全く無い。而して舟も概ね二個に分截して、貨車に積む可く出來てゐる。文明の利器は飽迄も調法である。

秩父鐵道は、從來幾多の難關を突破し、今や秩父の中心點たる、大宮町を貫き進み、柿原社長、米山取締役等の努力にて、今後彌よ有望の情態だ。近來長瀞の名、天下に高し。特に東京人士に取りては、一日の往復に、斯る勝遊の好地を提供せらるゝことは、會社は勿論、彼等の爲めにも、何よりの仕合と云はねばならぬ。

予等は午前六時前に、大森の家を發し、午後八時後に還つた。而して雨は東京に近づく歸途から始つたが、その準備をしてゐたから、別に當惑もしなかつた。同遊は妻、娘二人、近隣の並木淺峰君であつた。實は詩でも作くるつもりであつたが、見物に忙しくて、遂ひに一句も出來なかつた。此次は是非秩父大宮から、三峰神社に參詣したきものと思ふ。詩は其時に讓るととする。されどそれとても、山靈や、水神に、豫約して置く譯ではない。（大正十三年六月二日　大森山王草堂に於て）

雪見の講演

昭和二年三月十三日、埼玉縣豐岡町に出掛けた。此れは繁田武平君の懇望に任せてゞある。繁田君は、其の先考滿義翁以來、鄕黨隣里の爲めに、利用厚生、善風化俗の爲めに、献身的努力をなしてゐる。其の豐岡町に町長たる二十有六年、今や漸く後任者に、其職を讓りたるも、尙ほ凡有る方面に奉仕的生活をつゞけて

ゐる。豐岡大學の如きも、その一である。

大學と云ふも、學校ではない。地方の有志者を集めて、有用の學問に就き、各名士の講演を聽かしむることがそれである。卽ち予も其の一人として招かれたる譯だ。予は固より多用を以て、應ず可くもなかつたが、君の奉仕的行歷は、年來耳熟し、且つ君が『昭和一新論』の共鳴者たるを知りたれば、今更ら否む可き言葉もなく。將た其の近傍に史蹟を探る望もあつたから、旁た出掛くることとした。

ところが十三日は、早朝からの大雪だ。新宿から自動車を駛せたが、渺茫たる武藏野、唯だ白皚々。而して道も畑も埋め盡して、殆んど途方に迷うた。然も雪を帶びたる竹木は、垂れて道を遮り、屢ばその雪を除かねば通行が難かつた。繁田君邸では、牡丹餅の馳走に預つた。此れは豫約であつた。公會堂には、此の大雪に拘らず、豫定の聽衆が充滿した。殊に飯能や、川越や、若しくは上州富岡町や、或は某老夫人の如きは、態々東京から出掛られたのは、講演者に取りても、

欣快の至りであつた。

但だ史蹟見物どころでなく、歸路に就いた。自動車では、とても危險であれば、電車に乘ることとした。然るに危險は無つたが、停電はあつた。豐岡を出づるや、やがて約一時間、寒と飢とを辛抱して、停電車中に竦んだ。池袋から品川まで、品川から大森まで、又々遭うた。往時には約三時間、歸時には約五時間を費した。豐岡から所澤邊は、恐らくは一尺以上の雪と見受られた。實に根氣よく降る雪であつた。予は講演が目的であつたから、仁を求めて仁を得たるものであつたが、同行の老妻及び淺峰子には、聊か笑止と云ふ可きであつた。されど三人何れも、愉快なる雪見であつたと打語りつゝ、山王草堂の火爐を擁したのは、午後九時を過ぎてゐた。（昭和二年三月）

水戸遊記

一　上野から水戸

太平洋怒濤澎湃の聲を聞きつゝ、大洗より拜啓。

三月十四日、社から還りがけには、好天氣であつた。大森の借屋に、寢る時には、窓から星を見た。安心して睡つた。

十五日早曉、笻にて出掛けんとしたが、空模樣が面白くない。よつて又た傘を携へた。一笻一傘、和戰兩樣の準備をして出掛けた。白頭夫妻相拉へて、大森停車場から萬世橋迄省線電車、それから上野停車場に至れば、八時發水戸行には、五十五分前であつた。

同行には水戸出身の中川竹堂君あり。菱沼地方部長あり。又た石川編輯部長は、石岡に、鳥海君は土浦に赴く用務の爲め、而して小久保城南君の代理として、古

谷自由通信社長が、特に案内の爲め、同行せられたのは、感謝に値する。

上野驛で新聞を見れば、天氣模樣追々惡くなるとある。他の新聞を見れば、又々その通りだ。踏み出した足だ、雨となるも、雪となるも、構ふものでないと觀念した。果然雲は黑くなつた、やがて絲の如き細雨となつた。友部驛迄福見水戸支局長は、諸事打合の爲め出迎はれた。福見君は我行の爲め、十二分の骨折をした。併し天氣丈は福見君の努力でも致方はなかつた。水戸支局にて、福見君及び支局員諸君に御目にかゝり、福見夫人より午餐の御馳走になつた。

坐中には豐田女史、田中女史が相見えた。豐田女史は、藤田幽谷先生の外孫にて、東湖先生妹の子である。志士桑原幾太郎の女にして、史家豐田天功先生の子に嫁した。豐田天功先生は、水藩に於ける史家としては、安積老牛に次ぐ大家にして、大日本史の志表類は、專ら先生の手になりたるものと云ふ。豐田芙雄女史の名は三十年耳熟してゐた。日本に於ける女性敎育家として、有名の方である。年齡

は福見君から八十一とか承つたが、見た所では六十前後だ。然も活氣全身に溢り、流石に藤田家の血が流れてゐると思うた。壁上には烈公より天功先生に與へられた書簡を集めたる一幅を掲げ、卓上には、幽谷先生が十五歳の時に草し、それを山本北山が批評したる文稿、及び杉山忠亮の日記等があつた。之を見るに、其の文章と云ひ、其の書體と云ひ、十五歳の小童は愚ろか、五十歳の老成人でも、到底企て及び難き風情がある。

予は史料採集が目的で水戸に來つた。然るに今や活ける史料に出會した。豐田女史は卽ち其人だ。女史の記憶は極めて精確である。暫時談話の際に、得る所少くなかつた。而して予を見て、まあお若いこと、五十歳や、六十歳は物かは。七十以後は、聊か下り坂になりますから、少しく身體に氣を付た方が宜敷くありまず抔と、事もなげに語られた。予も吾社に於ては、『眼中之人吾老矣』の感をなしつゝあつたが、今更らお若いと云はれては、油をかけられたとは知りながら、何となく嬉しかつた。

斯く草しつゝある際、吾妻が日が出たと云ふから、後を顧れば、旭日は太平洋の洋心より、そろそろと輾り上りつゝあり。予は逗子觀瀾亭上より、恒に落日の美を賞しつゝあるが、今更ら初陽の海上に出づるを見て、一段の壯觀を覺えた。恐らくは今日は好天氣であらう。惡天氣の後には好天氣だが、其の好天氣の來ることが、餘り早い心地がする。

（大正十二年三月十六日午前六時前五分、水戸大洗魚來庵に於て。）

二　水戸より大洗

春寒惻々、春雨蕭々、新泥は阿部川餅より滑らかなり。予等は外套の襟をかき合せ、偕樂園に出掛けた。――三月十五日午後二時――風流は寒いものと云ふ眞理を、今や吾身に實驗しつゝある。

梅は半開と申したいが、中々以て左樣にあらず。正直の所が先づ一二分。但だ蓓

蕾は餘程膨らんでゐる。滿目香雪、想像するに難くない。而して清香は流石に馥郁として、人の衣袂を襲ふ。云はゞ目にて梅花を見ぬ代りに、鼻にて梅花を見る。而してより多く想像の梅花を觀る。

好文亭には、只今七百人の團體客が、辨當を食うて立ち退いたと云ふ刹那だ。然も予等が何陋軒の茶室に入りつゝある際、更らに二百名の團體客が押し掛けた。後から後から詰め籠み來りて、今は身動きも出來ぬ始末であつた。併し園の名は偕樂、茶室の名は何陋軒。その名に對して、今更ら苦情を申す可き理由がない。見渡す限り、民衆的氣分は溢れてゐる。

好文亭は烈公其人の趣味性の雛形だ。然も偕樂園に至りては、自然の形勝を利用し、人工を用ひざる所に、尤も幽賞す可きものがある。近く眼下に仙波湖を控へ、遠く太平洋の海光を望み、丘陵、田野其間に參差として、其の眼界の濶大なる、其の展望の變化ある。箱庭的の公園に比して、更らに別種の妙趣が看取せらるゝ。

但だ仙波湖は半は乾沼となり、園の麓には鐵道線路が、蛇の如く纏うてゐる。文化と風致とは、到底兩立し難きもの歟。

常磐神社に詣し、社寶を拜見し、轉じて祇園寺に抵り、心越禪師の遺物を見る。遺物は他所に預けあるとのことで、それを持ち來る迄に、繪はがき數枚を認めた。禪師の遺物中には、義公の施入にかゝる僧伽梨あり。其の裡には義公自筆にて、其旨を記しあり。禪師の請來にて、關羽の印と稱する銅印あり。特に見る可きは、禪師の琴譜及び印譜と、義公の書牘一卷であつた。禪師は百事に器用にて、諸藝に達してゐたが、篆刻に至りては、特に妙であつた。日本の篆刻界は、少くとも禪師によりて一轉化せられた。

此れから弘道館に赴いた。泥を踏み分け、拔き足、さし足して、八角堂の中に安置する弘道館碑を見た。歸途に城内を見んとしたが、日暝れて能はず、支局に立

ち戻りて、やがて守屋知事の公會堂に於ける晩餐會に赴いた。

守屋知事は學生の時には、故陸羯南の門下に遊び、新聞記者たらんとしたが、果さなかつたとの昔話をした。予は今からでも晩くあるまい。若し新聞界に來投せられん乎、何時でも驩迎すると挨拶した。食卓には水戸市の官民の重なる方方を見受けた。予は卓上の答辭として、少しく水戸及び水戸學に就て語つた。一言にして云へば、世の中の大事業は、根本的信念、若しくは理想と、社會的、經濟的、政治的、あらゆる方面から湊合し來れる大勢と、其の大勢を指導し、之を運用する人物と、三拍子揃うて出で來る。水戸は維新改革の信念、及び理想を興へた。云はゞ日本國民は、水戸學によりて、日本を見出した。尊王攘夷は、水戸學の興へたる理想だ。而して維新の劈頭に、所謂る直接行動をして、改革の端を啓いたものも亦た、水戸人である。若し公平に論ぜば、維新改革に就て、水戸は獅子の割前を取る可きものだ。

然も水戸が最後に於て、振はなかつたのは、頗る遺憾だ。されど日本帝國の見地からすれば、左程嘆ず可きであるまい。何故なれば、水戸は苗圃だ。苗圃は苗を仕立てゝ、之を他に移植するが役目だ。水戸自から改革の業を仕遂げざるも、日本全國に水戸の感化が行渡り、其の警發、刺戟、示導によりて、遂ひに其の目的を達するに至つたものと云はねばならぬ。苗圃に林樹無きは、寧ろ當然の事だ。

暗夜に車を驅りて大洗に著したのは、既に九時半であつた。暗中摸索、只だ怒濤岸を拍つの聲を聞くのみ。然も此れが太平洋の向岸から、眞直に押し寄せ來るものと思へば、何となく壯快の心地がする。

（大正十二年三月十七日午前五時廿分、太田町小林町長邸に於て。）

三　大洗より常磐公園

三月十六日は、意外にも快晴だ。昨夜は大洗名物の一なる按中の磯節を聽く代りに、濤聲を聽いて睡つた。今曉は亦た濤聲と興に起き出で、東海日出の壯觀を極

めた。

磯前神社を參拜し、附近の松原を散歩した。祠背の山は、櫛形山と稱し、松や椎の老樹が繁茂して、海上船舶の目標となつてゐる。然も今や椎樹の或物は枯損して、櫛の齒が缺けてゐる。

祠畔の丘陵、ひよろ長き大松が林立してゐる。然も何れもビサの高塔の如く、陸の方向に傾斜してゐる。眞に奇景だ。海上より吹き來る風力の程度、以て知る可し。予は此に於て始めて横山大觀式の松の實景を見た。畫家の經營慘淡、必らず由來する所がある。胸中の邱壑は、必らず眼底の邱壑と照應する所がある。造化、人間兩ながら相肖たりと申す可き歟。此邊松露や、防風の名物と聞く。松露は未だしだが、防風は砂上に、寸芽を抽んでゝゐた。

魚來たゝ、聊か關税を拂うた。云ふ迄もなく揮毫税だ。野田大塊翁の如きは、大名式に拂うてゐる樣だ。額も大塊、掛物も大塊だ。磯前神社の關宮司は、櫻田十七士の一人、關鐵之介君の後だ。君及び小神野訓導等に別れ、輕車を驅りて、子日原の松林を貫き、祝町を經て、那珂川の長橋を渡り、湊町の入口に至り、車を轉じて磯濱を過ぎた。

祝町は水戸藩時代より常設洗濯屋の地である。洗濯屋とは、解釋する迄もなく娼家の事だ。此れは予が新發明の語でなく、實は往時水戸藩の布達に『此度那珂湊於二町祝一洗濯屋相立候に付』云々の文句に原くものだ。

磯でまがり松、湊で女松、中の祝町や男松。

磯濱、祝町、那珂湊、何れも烟花の郷であつた。

惟ふに那珂湊は、石卷港より江戸に至る中間、殆んど唯一の碇泊所であつた。仙臺米の如きも、江戸灣に直送する以前は、此港より陸揚げし、更らに河水の便を利用して、江戸に轉輸したものだ。されば今日寂れたりと雖も、昔時の面影は、尙は幾許か此の方面に存してゐる。

水戸市に入る以前、徑して常照寺を訪うた。常照寺は大德寺派だ。門前より方丈に至る、點塵だもなし。觀る可きものは義公の遺墨也。其の傍訓を加へたる小楷の千字文は、尤も精妙だ。端なく壁上に楞伽窟老漢の達磨の自畫贊を見て、坐ろに故人を思うた。寺は臨濟であるが、何となく福々しくして、禪酸の風味は見出さなかつた。

此れから水戸城を瞥見し、彰考館の文庫拜見に出掛けた。

四　彰考館

彰考館は、義公の修史館也。彰考とは古を考へ、今を彰はすと云ふ意味だ。水戸義公の事業は、必らずしも修史の一には止らぬが、其の天下後世を稗益し、世道人心を感化し、維新大改革の源を成したる功績は、主として此に存すと云はねばなるまい。

義公の修史は、物數寄の殿樣の道樂仕事でなく、眞面目なる事業であつた。元來水戸は、提封三十五萬石と云ふも、其實は二十五六萬石に過ぎず。佐竹氏の往時、八十萬石と稱した際には、常陸太田を本據として、南は下總、西は下野、北は陸奥に及んだが、水戸德川家に至りては、常陸の膏腴の地方は、却て他領にありて、寧ろ多く瘠土を保有するに過ぎなかつた。水戸殿のすり切り（貧乏）は、今更らの事ではなかつた。然るに其の二十五六萬石の內より、修史の費用に八萬石を割いたと云ふことであつたから、如何に多大の國帑を、此れが爲めに費したかゞ、想ひやらるゝ。

義公は學術上の顧問として、明の遺民朱舜水を聘用した事は、云ふ迄もない。苟も修史の方面に取りて、一藝一能ある者は、日本全國を搜し廻りて、殆んど剩す所なく之を用ひた。栗山潛鋒、三宅觀瀾、及び舊臣下である安積澹泊齋老牛の如きは、其の尤も傑出したる者だ。實を云へば、餘りに修史の爲めに、多く士を用ひ過した傾向が無いでもない。諺

に人多くして做し得ず、人少くして做し得ずと云ふが、或は餘りに人物使用が、多きに過ぎたのではなかつたかと思はるゝふしもある。

義公が其の資料の採拾に骨折りたる事は、とても今日の如き、交通の便宜と、一切の記錄、文書が開放、自由である世の中から、想像のつく可き樣がない。

所謂る今日の彰考館は、此の人物と、資料との記念館と見る可きものであらう。然も其の書籍は散逸し――世間に彰考館印記の書籍少くない――其の資料は、佚亡したるものあるも、其の典型の依然として、今日に存するは、如何にも殊勝の事と云はねばならぬ。

予は曾て彰考館總裁川口長孺の征韓偉略を讀み、其の朝鮮人の著書を引用する

の多きを見て、如何に彰考館の史料に豐富であつたかを想望した。今も現に其の書架を一見して、其の然る所以を見た。而して佛典の如き、耶蘇教に關する書類の如きも、烈公時代に蒐集したるもの、鮮くなかつたらしく思はれた。

義公の修史が、殿樣の道樂仕事でなかつた如く、其の學問も決して殿樣學問ではなかつた。如何に濟々たる多士あるも、眞成の修史館總裁は、義公其人であつた。

修史に關する根本主義は、固より諸士の討論、潤色を經たには相違ないが、槪ね義公によりて草創せられ、且つ義公によりて、審定せられた。義公は固より潛鋒や、老牛の如く、專門的知識と、專門的筆力との所持者ではなかつた。然も修史家の第一たる綱領、義例は、悉く彼の親裁に出でた。

此點に於ても、義公は第一流だ。

若し義公にして在らば、必らずしも多士の多きを厭はざるも、後主に至りては、其の親裁者なきが爲めに、議論にて日を暮すことになつた。而して更らに後に至りては、史材少くして、議論却て多きの弊を致した。物質的經濟に於ては、水戸の修史事業程、贅澤なるものは無かつた。

予は義公の自から定められたる大日本史義例の草按を見、史料採拾其他に關する

義公の隨時思ひ付やら、指圖やら、命令やらの書き留め帳を見、而して義公の自ら大日本史原稿に對して、其の批評、修正を加へられたる附紙を見、實に義公の學問の素養あり、而して義公の修史の、眞劍であつたことを、十二分に確かめ得たことを悅ぶ。

而して義公が史稿草案に、其儘筆を加へず、悉く附箋を糊づけしたのは、如何にも自ら學者的位地を占めざる謙遜にして、敬虔の態度に感服せざるを得ぬ。最後に予は、予に短き時間に、多くを示されたる、彰考館主任雨谷君に向て、其の好意を感謝する。

五　水戸より太田

今宵少し彰考館に在りたき心地したが、常磐公園なる清香亭にて、塙七平君、齋藤斐君等の主催にかゝる、午餐會に後れざらんが爲めに、再訪を雨谷君に約して赴いた。昨日の雨、今日の好天氣、特に吾心も彰考館の空氣に打たれて、活々した。

塙君は有名なる收藏家だ。其の携へ眎された、東湖の弘道館記の如きは、世間幾多の贋東湖を見た目には、眞に嬉しかつた。來會の諸君は、何れも水戸の民間に於ける重なる方々であつた。其中には朝鮮以來の知友であつた柴勝三郎君、又た從前より面識の吉見輝君、我が同業の江戸周君等があつた。

齋藤君の挨拶に對して、予は少しく答辭を陳べた。齋藤君は予に向て、單に過去の水戸を探討するのみでなく、現在の水戸に就て、誨を垂れよと申された。然も予は政治家でなく、實業家でない。故に現在何等の稗益を與ふ可き力がない。但だ茨城縣に緣故尤も深き國民新聞を透して、貢獻せんとを期す。而して予の最も報効を期するは、過去でなく、現在でもなく、將來である。せめて諸君の子孫の爲めに、或物を遺さんと期してゐると答へた。

塙君は實業家中の論客である。過日郵書に托して、其の作を示された。それにて

君は予と同甲であり、共に還暦翁であるを知つた。併し其の元氣は、とても予の企て及ぶ所ではなかつた。予は多く語るの時間なきを憾みとした。而して揮毫の支度も、そろ〳〵出來てゐたけれども、太田に赴く時迫りたれば、素絹、白紙のみを携へて、匆々辭し去つた。敢て喰逃の罪を犯したのではない。

水戸より太田へは、自動車道としては、實に理想的だ。元來棚倉街道にて、六里の間、一の阪だになく、眞に滿目の沃野、舊水戸藩の富源は、此中にありと思はれた。小林太田町長及び檜山君、木村君、片岡君、石川君、其他、郡境なる久慈川の橋畔迄出迎られた。而して相共に前後して、太田町なる小林町長の邸に入つた。

太田町は流石に佐竹氏の居城であつた程にて、今尙ほ茨城縣の一都會だ。舊來は奥州、野州にかけて物資の供給地であつたが、今や鐵道の便開けて、爲めに太田が物資集散地たるの位置を失ひ、且つ烟草專賣制度の爲めに、其の重なる物産たる、烟草商業地たる利益を殺がれ、頗る昔日の繁昌を減じたと云ふことだ。然も予の見た所では、中々立派な町である。他日市制を施くの期、必らず來るであらう。而してそれは決して遠くあるまいと直覺せられた。

太田市街は丘陵の上にあり、宛も馬脊の上に、家屋が並んでゐる樣だ。小林君の家は、當地の舊家の一だ。元來佐竹侍にて、佐竹氏が秋田に移つた際、此地に居殘つたのだ、或は殘されたのであるかも知れぬ。其の同姓は秋田にありて、舊藩の頃には、互ひに親類附合をしたと云ふ。予は小林君が、其の公私多忙の身を以て、東道の主人となり、予等を館し、予等を案内し、一切の便宜を與られたことを感謝する。而して併せて令夫人、令息、令孃及び一家の方々に感謝する。

小林町長は、今や其の町並の自個家屋の後に、新築最中である。予等には其の新館に宿泊するを許された。君は頻りに野人禮に習はずと申されたが、其の言葉は此方から熨斗付けて、返上せねばなるまい。君の接待は至れり盡せりで、何と

も禮意を申す言葉がない程であつた。

十六日の夜は、同所の釜萬樓にて、小林君の案内にて、同町の有志、重なる方々と相見た。小林君の挨拶には、予が學士院の恩賜賞に預つた事迄をも援き來りて、予に對し過當の頌辭を與へられた。予は諸君に向て、少しく修史の目的、及び義公の偉大なる人物であり、而して其の功績は、更らにより偉大であつたことを陳べた。水戸支局の福見君は、大演說であつたと云うた。此れも溢辭であり、大字丈は控除す可きであらう。併し予も小林君の挨拶に釣りこまれて、やゝ長講義に亙つたことを悔いた。次に太田中學校長伊藤君の演說があつた。伊藤君は高知出身にて、中學校の主と呼ばれてゐる。創立以來の人だ。今日は久振りに先生らしき先生を見た。

小林君の邸には、茨城縣下の、新聞業者の重なる方々が、吾社の鳥海君と與に待ち受けてゐた。故に予等は小林君と與に、中座して之に赴いた。斯くて諸君と與に、新聞に關する雜話を交換した。諸君が折角予を來訪せられたのは、予が感謝する所だ。然も諸君の好意に、何等酬ゆる所なきを憾みとした。但だ予は諸君に向つて、舊聞記者となりたればとて、併せて新聞記者を辭職したものでない事を告げた。魚は干物となれば別だが、生きてゐる中は、水に棲まねばならぬ。予も干物となる迄は、新聞記者であらねばならぬ。

新聞記者は、予の生命である。之を辭職する時は、予が此世を辭職する時である。予の歷史家は、只だ歷史家たらんが爲めの歷史家ではない。新聞記者としての歷史家だ。予は右の如く諸君に語つた。

斯くて三月十六日は、極めて面白く、且つ有効に暮らした。吾家の心地して、小林君の新邸に安眠した。

六　太田より瑞龍山

三月十七日は、鴉と共にと云はんより、鷄聲と與に起た。小林君の一家には、安

眠を妨害せざる積りであつたが、蚤くも主人公に覺られた。此れでは泥坊學は落第であると大笑した。

朝飯前に、若干の揮毫をした。而して小林君の藏幅若干を見た。且つ小林君の祖父君が、京都にて調へられたる多くの扇面を見た。藏幅中には、藤田、會澤諸老の書、立原杏所の畫等があつた。杏所の山水大幅は、逸品に庶幾かつた。而して杏所の父翠軒老人の、赤壁賦中の語を綴て成したる七律は、詩と云ひ、書と云ひ——特に書が——面白く覺えた。

若し十五日の雨が、十六日迄續いたならば、十七日は晴ても、瑞龍山行は困難であつた。然も昨日來の晴にて、道は乾いた。十七日の朝は曇つてゐたが、やがて日光は漏れ來り、昨日よりも風和かに、氣溫かであつた。眞に春風は習々として、和かに行客の面を吹いた。

瑞龍山にては、所謂る御裝束御殿に入り、管理主任西野君の好意にて、寶藏を開らき、數點の義公、及び烈公の遺物を拜見した。義公の西山隱棲時代の衣服、又た家康公傳來の胴服、羽織等を見た。又た常山文集の古寫本を見た。此れは原稿本でなければ、それに庶幾きものであらう。義公の書ではないが、義公を去る遠からざる時の書だ。義公の『久昌寺經藏開山檀那源光圓道』の石印を見、乞うて其の印影を得た。

それから磴道を蹈み、山徑を過ぎ、義公壽藏の碑を見、其の墳を拜し。朱舜水の墓に詣し、更らに威公より烈公に至つた。烈公の墳は、瑞龍最高處にある。而して遙かに溪谷を隔てゝ、義公の墳と相對す。溪谷の岐に、朱舜水の墳がある。

予は熊本に於ける細川家、廣島に於ける淺野家、會津に於ける松平家等の墳墓を見た。然も大體に於て、未だ此の如く規模の宏大なるものを見ない。所謂る終を愼み、遠きを追ふ義公の志も、此處に於て見るとが能ふ。

但だ山中の老松は、日立銅山の烟毒の爲めに、其の翠色を減じたのみか、枯死し

たものも、少からずと聞く。予は記念の爲めに、西野君に請て、樫實と、寸餘なる樫苗とを、山徑より採拾して、之を携へ還つた。

此邊は烟草の產地と覺えて、烟草苗を仕立てつゝあり、巨大なる柿樹も少くない。桐畑もまゝ見受けた。

車を太田に廻らし、今は小學校となれる佐竹氏の城址を見て、西山へと赴いた。

此處は太田町の北なる一高阜にて、俗には御殿山と云ふ。古は佐野の唐澤山、新田の金山、佐竹の太田が、關東三個の、名城と聞え、築城以來未だ一回も攻め落されたるとがないと云ふ。然も今や全く廢して、只だ其の殘壕を剩すのみだ。而してそれさへ既に夷られつゝある。但だ校庭の櫻樹は、何れも卒業生の植ゑたものにて、樹齡三十年前後と云ふが、一株一林の姿にて、其の成長は驚く可きであつた。開花の時が想ひやられた。

七　義公の西山

西山は太田の西北なる峰巒にて、五里の山つゞきがある。西山莊は太田町から十餘町を隔て、增井川に架したる桃源橋を渡りて行く。今は圮橋も、鐵とコンクリートの橋となり、橋名のみが古を存してゐる。此の附近從來桃の名所であつたさうだが、今は全く廢してゐる。木村君が古を偲ばん爲めに、若干移植したが、何れも道傍樹のことなれば、乍ち他に戕伐せられて、今は君も斷念したと聞く。

併し街道を左折して、山間に分け入れば、やがて翠杉の蓊鬱として、天に參して小杜をなしてゐる。而して溪水が涓々として其の側を流れてゐる。突き當りて茅屋が見える。此れが西山莊だ。此處には伊藤中學校長、木村君等先著してあり。予等は小林君、石川君、片岡君等と共に、管理者岡村君の案內にて、網代門を入り、直ちに庭內より祠堂に抵り、義公の塑像を拜し、御座の間に入つた。

家は山間の溪窮まる所の一軒家にて、僅かに外に向て竹籬を結ひ、後は山に面して、別に墻を設けてゐない。御座の間は十疊にて、御次の間は十一疊。其の隔に

は敷居がない。此れは一座して誰彼の差別なく、談話する爲めに、特に敷居や襖を除いたのであらう。御座の間には、二尺の押込の棚がある。此れは書物を置く所らしい。御座の間の次が六疊の御納戸にて、公の寢室だ。その次に六疊の板間がある、此れは物置だ。而して其先に斗出したる三疊敷の圓窓の、白梅老樹に對したる一室が、公の書齋だ。

家の構造は、何れも二間足らずの梁を用ひ、總萱葺にて、柱は八尺五寸の杉丸太、廊は板にて、椽には竹を使ひ、釘隱しは何れも貝殼を用ひてある。之に比すれば石川丈山の詩仙堂も、聊か物數寄に偏したる樣に思はる。門外の翠杉は、義公が熊野から移植したものと云ふ。門庭には梅柳數株あり、特に祠堂の側には、銀杏の大樹がある。庭前には心字の池がある。其外は直ちに山に接してゐる。猿でも、鹿でも、勝手に來遊が能ふ。

予は曾てヤスヤナポリヤナなる杜翁の居を訪ひ、所謂る杜翁の簡易生活なるものを見た。然も義公の簡易生活に比すれば、頗る遜色あるに似たり。公は其家を兄の子に讓り、其の初志を全うして、所謂る罪なくして、飽迄配所の月を眺めたものだ。而して十年の晩節は、此の幽棲に送つた。生活術に於ては、義公は實に高趣を極めた。

予等は御座の間にて、辨當を開らき、八十五歳なる岡村老人の弘道館記、桃源橋の碑文、梅里先生碑陰文等の背誦を聞き、其の老て彌よ壯なるを欽し、相共に義公の舊を語り、岡村君父子の爲めに、揮毫をなし、太田町なる小林君の邸に還つたのは、漸く一時過ぎであつた。

小林君は、予が今朝翠軒老人の一幅を激賞したからとて、慨然愛を割いて之を貽つた。予は書畫を愛好するも、其の所有慾は、寧ろ濃厚でない。予は手を八方に擴ぐるを欲せず——其實は能はず——只だ書籍の蒐集者たるを以て足れりとしてゐる。然も君の好意は之を空しくする能はず、欣然之を受けた。

因に云ふ檜山君亦た、東湖の秋興八首中の若干を書したる、折手本を貽られた。是亦た此に記して謝意を表す。

二時前に小林町長の邸を辭し、太田町の諸君と相別れて、水戸に向うた。小林君は送て水戸に至つた。福見支局長の門前にて、記念撮影をした。福見君、支局員諸君、其他偶然の來訪にて、守屋知事、田中檢事正、岩元内務部長、吉見君、齋藤警察部長、塙君、齋藤君、豐田女史、其他の方々をも、其中に加ふるを得たのは、予等の仕合であつた。

田中檢事正は、立原翠軒、原伍軒等諸名流の書牘を携へ示された。伍軒は卽ち原市之進だ。彼は東湖の尤も望を屬したる青年の一人であつた。彼は水戸の人物として、後勁者の隨一であらう。

此行は往復を加へて、唯だ三日であつた。然も得る所、頗る多かつた。是皆な水戸及び太田に於ける官民諸有志の好意による。而して吾社の水戸支局長福見君の斡旋を煩はしたる事、多大であつた。而して始終予等と行動を共にしたる、吾社の水戸出身の中川君に負ふ所少くなかつた。中川君は精力家であるが、然も予が老人の僻として、餘りに早起するの一事には、多少當惑せられたであらう。併し君が若し予の年齡に達せられたらば、必らず其の已むを得ざる事情を、諒とせらるゝであらう。

大正十二年三月十七日四時四十分發にて、諸君の見送を辱うして、水戸を發し、途中迄、福見君、及び令孃、令息、鳥海君、高木君等と相伴ひ、上野にて中川君と分れ、大森の僑居に案著したのは、午後九時過ぎと云はんよりも、寧ろ十時に近かつた。

汽車中では、數點の雨が降たが、汽車を下れば、傘の必要は無かつた。取り敢へず袋から吉原殿中と、のし梅とを出して、家族に馳走した。

（大正十二年三月十九日午前九時、大森の山王草堂に於て。）

水戸義公三百年祭

一　助　川

七月十日〔昭和三年〕正午過ぎ、水戸に於ける義公生誕三百年祭に參列す可く、出掛けた。車中大半は、在京の水戸人士で、何れも同一の目的もて、出掛けたる方々らしく見受けた。

予等はとても水戸には宿泊の場所さへ無ければ、助川まで直行し、翌朝水戸へ引返さんとの心組であつた。然るに途中まで田中伯より特使來り、是非水戸にて面會致したしとのことにて、乃ち公會堂に赴き、先著の伯と相見た結果、兎に角明日時間を繰り合せ、義公頌德の講演をすることになつた。此れは過日來再三再四、理わり拔いたところ、今更ら八十六翁の田中青山先生からの言なれば、申し返す義理もなく、潔ぎよく敬承した。

斯くて我等は水戸から八里の濱街道を、一氣に自動車にて馳つた。昔ながらの松並木、今は往來の人も稀れだ。雨雲は蒸し熱くあるも、晩涼は松梢より度りつゝある。途中は小松原や、萇畑にて、既に半は萇の花が咲いてゐる。

助川に入れば、鰹の大漁と覺えて、驛夫らしき男が、鰹を手に提げつゝ行くやら、又た魚籠一杯に鰹を滿載したる魚賣やらに出會した。我等も今夜は定めて鰹の刺身に有りつくならんと樂んだが、それだけには裏切られた。

常磐館に入れば、日立鑛山の諸君は、我等を待受け、會食せんとのことであつたが。予は明日の不意打の講演の爲めに、準備の都合もあれば、その厚意のみを受取りて、御馳走だけは御免を被つた。

常磐館は實に海濱の旅館としては、總ての意味に於て、佳良である。太平洋の波は、澎湃として、我等が立つてゐる脚下の白沙を洗うてゐる。滄海渺漫、眞に一點の眼界を遮るものがない。

七月十一日、早起、館主の需に應じて、『大海長風捲紫瀾』の扁額を書す。我等の室には杉聽雨居士の『眠雲聽泉』の額を掲げてある。書も語も結構だが、場所柄には妥當でない、是れ予が禁を破りて、拙筆を揮うたる所以。

想起す、故吉田君勿來と磐城平に講演に赴きたる際、助川に一泊したるとを。曾遊二十有餘年。坐ろに亡友を憶うて憮然之を久うす。

二　水戸から長岡

水戸は昔から隨分議論の多い土地柄だ。されど義公三百年祭は、實に水戸に於ける、擧縣一致の仕事だ。而して水戸市の賑ひは、殆んど水戸全縣下を、一市に吸集したるの狀を示してゐる。義公の神靈も、定めて滿足せらるゝであらう。

祭典は七月十一日午前十時、別格官幣社常磐神社にて、莊嚴に執行せられた。非常なる雜沓の中に、秩序を保つ、委員諸君の勞想ふ可し。我等も亦た玉串を捧げて、公の高義を崇景し、而して我が皇祚の長久と、國運の永昌とを祈つた。

我等は田中伯、江木千之翁等と共に、祠畔の清香亭にて、森岡知事より午餐を供せられ、それより彰考館に赴き、雨谷君を煩はし、百忙中、數點の珍籍を欽賞し、去つて綠岡なる德川侯爵家の別邸に於ける、義公の諸遺物を拜觀し。邸内の靈廟に詣した。靈廟の入口にある鐵の擬寶珠は、文祿三年の字を鑄出してある。佐竹氏舊城の遺物であらう。靈廟は蒼松の林中、背に山を負ひ、前に野を控へ、如何にも神々しき勝地である。

我等は講演まで、尙ほ一時間を剩すから、直ちに長岡に赴いた。此れは水戸から江戸への本街道にて、途中の松並木は、何となく東海道のそれを聯想せしむる。

水戸の近事を知るものは、長岡を知らぬものはあるまい。長岡は實に天狗黨の諸士の、屯在したる所にして、單に水戸と云はず、近世日本史家の閑却す可らざる要地だ。

我等は長岡町の街道を左折して、高岡神社の境内に入つた。祠は小なれども、松

や、杉や、槭や、欅や、實に喬木天に參してゐる。此れから小徑を横ぎりて行けば、更らに極めて小なる祠堂がある。此れは楠公の社にして、其側に碑が立つてゐる。此れは田中伯が建立し、昨十日建碑式を擧行せられたるものにして、上に櫻田烈士記念碑と題し、下に高橋多一郎君の作を錄すとして、

菊水の清き流れを長岡に
酌みて御國の塵を洗はむ

と鐫りてある。

碑畔から見下せば、一面の青田にて、午熱甚しきに拘らず、風はそよそよと、我襟を吹き來る。『古人不レ死此心傳』の句、豈に我を欺かん哉。

三　長岡より水戸

歸途は長岡町なる木村熊之助氏を訪ひ、當時の壯士が、憤慨の餘、斫り附けたる、刀痕斑々の柱を見、茶をも喫せずして、先づ其の所藏の水戸數先輩の遺墨を見た。

幽谷先生の詩は、特に木村氏の祖先善三氏が、文化年間、幽谷先生の江戸より歸郷の途中、相迎へて請うたるものである。幽谷先生が、善三氏の驩迎に滿足せられたる心地は、詩句の中に現呈せられてゐる。

東湖先生のは、屏風半双に、李青蓮の古風を書したる、此れは曾て明治天皇の宸覽に供し奉りたりと云ふ。又た花見の畫に題したる詩がある。其他藤田小四郎、高橋、金子諸氏の作等、一々記するに、遑あらず。木村氏は代々庄屋の家柄の由にて、天和、元祿以來の制札なども、玄關側に積んであつた。

此れから直ちに高等女學校なる講演場に、漸く時間通りに驅けつけた。而して約一時間半、義公頌德の講演をした。此れは殆んど不意打にて、何等の參考書も無く、全く胸臆より吐き出したるものに過ぎず。慚愧の至りであつた。されど若し聊かにても、義公頌德の意味に副ふことがあつたならば、講演者も亦た徒勞でなかつたと信ずる。

予は既に過般東京なる青山會館にて、『維新回天の偉業に於ける水戸の功績』と題して、予が所見の一斑を演じ、且つ更らに一書として世に問うてゐる。されど今度の講演は、寧ろ義公の人物、人格に就て語りたるものにして、必らずしも前言を繰り返したのみではないと信ずる。他日機會もあらば、或は之を筆錄して、天下の識者に誨を乞はんことを期してゐる。

斯くて新任の學務部長山縣三郎君や、本多『いはらき』新聞社長等と、公會堂の一室にて、晩餐を共にした。山縣君は含雪元帥の孫、素空大人の三男。今日君に於て、故人の典型を見るを悅ぶ。

會食中には、京都無隣庵や、朝鮮京城や、椿山莊などの思出話を、交換し、水戸發の終列車にて、一道涼風に送られ、我が大森なる山王艸堂に歸著したるは、既に十一日の夜半であつた。

車中にて聞けば、德川圀順侯は、此の機會に於て、縣に五萬圓、市に五萬圓、何れも敎育費として寄附せられたと云ふ。水戸德川家の內福でなきは、昔ながらの事、然るに斯く奮發せられたるとは、我等水戸人にあらざる者にも、極めて快心の事である。此れは義公の靈前に奠へられたる、何よりの供物であらう。

四　彰考館瞥見記

彰考館は、必らずしも珍籍奇書の府ではない。義公の目的は全く實用であり、實用以外の道樂として、書物を蒐むることは爲さなかつた。公と同時代の、加賀松雲公とは、叔姪の親あるも、一方は二十五萬石、他方は百萬石、とても競爭相手としては、齒が立たぬ譯合もあつたからであらう。從て前田家には、專ら金目に絲をつけない、珍籍奇書が蒐集せられた。

此の如く彰考館の目的は、專ら實用であつたにせよ、亦た奇書珍籍が無いでも無い。記者はほんの寸時の間もて、雨谷君の好意にて、其の若干を拜見した。

記者は金澤稱名寺第二世劍阿和尙の筆にかゝる、日本書紀神代の卷――摹刻丹鶴

叢書、記者後に其の板木を得て再刷す、今ま板木は大正十二年九月大震火災に焚け了りぬ――原本を藏するを聞いてゐた。然るに雨谷君の出し示したるものは、それでなくして、それと略ぼ同時代、卽ち鎌倉末期のものであつた。其の第一卷の奥書には、

于レ時嘉曆第三執禪之年、季秋中旬闢茂之日、就二長和親王勅請一、以二遍照寺法務之日一、祕決授二春公和尙一畢。梵字 □□□□□□ 廻季六十八法年四十一

嘉曆三年戊辰夏五十七日、手親終二書點之功一者也。一字一畫不三敢借二他之筆一矣。心宗沙門劫外曇春於二巨福山建長蘭若書窓一記レ之

とある。劍阿のは嘉元四年（德治元年）九月十九日とあれば、それに後るゝ二十有二年だ。知らず丹鶴本の原書は、果して何處にある。

更らに金澤文庫の黑印を捺したる、周易正義の四冊より九冊までを見た。此れは烏絲欄の內に、正楷にて書し、貞字は闕筆してゐる。惟ふに宋槧より謄寫したものであらう。字體は寫經生のそれに似てゐる。蓋し鎌倉中期頃のもの歟。

更らに義公の御手許本として、元槧の瀛奎律體がある。その特に奇とす可きは、開卷の序文と目錄の二三葉の欠を、義公親から筆寫して補うてゐるよだ。序文の末に、

日本慶安壬辰九月　常山人書

とある。慶安壬辰は承應元年にて、義公二十五歲の時だ。

尙ほ彰考館の原印を見る。其の印面の上には、相公篆、元祿己巳之歲、力石忠一考、伴資矩刀とある。元祿己巳は元祿二年にして、義公六十二歲の時だ。伴資矩は、實に義公の命を以て、心越禪師に篆刻を學びたるもの。別に其の複製とも云ふ可き、獸鈕の銅印をも拜觀した。此れも複製とは云へ、古雅愛す可きものであつた。

以上は彰考館に於ける、瞥見の記憶を記したるに止まる。他日機會を得て、改

めて徐ろに其の秘庫を窺ふことを樂みとしてゐる。（昭和三年七月）

筑波遊記

一　筑波神社

予は現代的言葉で云へば、筑波山にあこがれてゐる。少壯の折、向島邊を遠足しての歸途、吾妻橋の上から、暮色蒼然たる秋の空に、筑波の黛色が、美人の双眉の如く、浮き出してゐる光景は、何とも名狀し難き趣きがあつた。

頃は山上まで、鋼索鐵道が出來たと云ふとなれば、疊の上を行くも同樣であらうと想ひ、去る七月四日、修史室の高橋君、及び末子武雄を拉へて出掛けた。前日は曇小雨の豫報に關せず、好晴であつた。當日も同樣の豫報で、晴雨共に半信半疑の間に出掛けた。

土浦から吾社の通信員樋口君、及び筑波鐵道の栗原君が、案内役として一行中に加はつた。天氣模樣は、愈よ怪しくなり、筑波驛に著した頃は、小雨ばら〳〵降り出してゐた。而して筑波の双翠も、今や全く雲霧の中に閉されてゐた。

同驛にて筑波町の諸有志に迎られた。而して一氣に筑波神社の鳥居下迄、自動車にて上り、それから藤咲社司に迎られ參拜を遂げ、社務所にて茶を喫して、神庫の諸寶物を拜見した。

此處も元來神佛混淆にて、維新當時分離の厄運に罹り、佛寺、伽藍、堂塔等を破壞し去りたれば、建物等は皆な明治年代、新らしきものばかり。而して古文書などは、殆んど見る可きものは無つた。

但だ寶物中に、林信篤が、隆光僧正の求に應じて書きたる『恩賜菅神自畫肖像記』は、文章も、筆跡も、改めて云ふ可き程のものではないが、元祿時代の史料として、若干の價値なしとしない。卽ち此の一文中に、綱吉、隆光、信篤等の關係がそれ〴〵現はれてゐる。

所謂る菅神の自畫像が、自畫像でないは勿論だが、恐らくは足利時代のものであらう。道眞の容貌としては、餘りに鬼氣人に逼つてゐる。尤も彼が雷神となりて、紫宸殿上に墜ち來た面相とすれば、此にても通用しないことはあるまい。

此れから鋼索鐵道に乘りて、山頂に上る。一哩六鎖、約工費五十五萬圓、五分の一から三分の一の勾配であれば、殆んど階子を立木に建てかけて上るよりも急だ。何故に斯く工費がかゝつたかと云へば、其の線路に横る巖石、概ね閃綠岩で、燧石の如く固くて、とても手が當らぬからだと云ふ。

二　雨中の登山

筑波綱索鐵道の極まる所は、男體山、女體山の中間にある窪地だ。左すれば男體山、右すれば女體山だ。而して此の窪地に、二三の飲食店がある。雨中に拘らず、登山客雜沓す。此れは日曜日の爲めでもあらう。されど鋼索鐵道の昨秋落成以來、頓に登山客が增加し來りたるは、爭ひ難き事實だ。

我等は先づ男體山に上つた。登り口のところに、名物夫婦餅を賣る茶店がある。其中の一が、筑波義擧の主謀者の一人、藤田小四郎が、此處に來り自から書し、自から彫刻したる、依雲亭の額を藏してゐる、依雲亭其物だ。

同行の案內者諸君は、何れも眺望の美を說き、壯を說き、快を說き、大を說くが、如何せん今日は雨に風さへ加はり、脚下三尺以外は、雲霧濛々だ。昔は鐵鎖ありと聞いたが、今は鐵鎖によらざるも、步行に難からず。されど雨中の山石、靴裏の鐵鋲の爲めに、特に滑りて、動もすれば轉ばんとする數次。

今更ら詩など案じてゐる餘裕もなく、只だ無事に男體山の絕頂に達せんことのみを、是れ急としてゐる。前人後人、相ひ呼應して行く。上る者、下る者、相ひ觸れて、避るに遑あらず、其狀宛も霧海の航行に、汽笛を鳴らしつゝ進むが如し。漸く絕頂の男大神の社前に詣し、雲霧の霽るゝを祈つたが、衡山の雲を排きたる、韓退之程の精誠が足らなかつたものと覺えて、其の甲斐もなく、風は倍〻急にな

り、巖上に佇立すれば、人を吹き倒さんばかりの凄さであつた。

山階宮御創設觀測所前を通りて下る。上りよりも下りの方が、骨が折れた。窪地の茶店にて、携へ來れる辨當を喫し、此にて元氣を付け、更らに女體山に上つた。

此方は道は遠いが、勾配は男體山程急峻でない。男體山が八百七十米、而して女體山は更らに八米を加ふ。

此處でも女大神の前に稽首し、天候恢復を祈つたが、風威愈よ激しく、とても傘を開く可きでないから、傘を杖として下り初めたが、乍ち柄の眞中よりポッキと折れた。

男體、女體の絶頂にては、濃霧重雲、渾身の濕れ以外、何の得たるものは無つた。袖は絞る程にはならなかつたが、麥藁帽子は、蒟蒻の樣になつた。併し記念に、絶頂の巖に附いた苔やら、草やら、少しづゝ齎らし還つた。

三　筑波と富士

人でも山でも、其の位置が大切だ。筑波山は如何に威張りても、標高八百七十八米―男體山は八百七十米―に過ぎない。卽ち二千九百尺に過ぎない。然るに天下の名山として、古今に喧傳せらるゝは何の故ぞ。それは關東大平原に南面するからだ。乃ち泰山が、齊魯の間に、雄崇を誇ると同一理由だ。

されば筑波と富士とは、何時も双稱せられてゐる。東湖の句に曰く、『駿岳常山指顧中』と。所謂る西に富士、東に筑波は、江戸兒の山に對する理想と云はんよりも、常習觀念であつた。而して關東の民俗が、種々の意味に於て、筑波山を神明視して、崇拜したとも、決して一朝一夕の故ではあるまい。彼等は筑波に祠る伊弉諾、伊弉冊の二神を拜するよりも、寧ろ筑波山その物を、男女二神として拜したものであらう。乃ち其の双峰を以て、男女二神の象徵としたとも、決して近代的の事ではあるまい。

申す迄もなく富士山は、其の標高三千七百七十八米、卽ち一萬二千三百七十尺だ。

標高のみでも筑波山に比して、四倍以上だ。然るに之と相對的に唱稱せらるゝは、筑波に取りて、何たる僥倖であらう。

然も此れは近世的の都々逸とか、葉歌の文句ばかりでない。元明天皇の和銅年間に出で來りたる、常陸風土記などにも、既に相對的に叙述せられてゐる。

古老曰、昔祖神尊巡二行諸神之處一、到二駿河國福慈岳一〔富士岳〕卒遇二日暮一。請欲二寓宿一。此時福慈神答曰、新粟初嘗、家内諱忌、今日之間、冀許不レ堪。於レ是祖神尊恨泣詈告曰、卽汝親何不レ欲レ宿。汝所レ居山生涯之極、冬夏雪霜、冷寒重襲。人民不レ登。飲食勿二奠者一。

此の如く祖神尊は富士神に、一夜の宿を謝絶せられて、詛の言葉を以て酬いた。

更登二筑波岳一。亦請二容止一。此時筑波神答曰、今夜雖二新粟嘗一、不二敢不レ奉二尊旨一。爰設二飲食一、敬拜祗承。於レ是祖神尊歡然謂曰、愛乎我胤、巍哉神宮、天地並齊、日月共同。人民集賀、飲食豐富、代々無レ絶。日々彌榮、千秋萬歳、遊樂不レ窮者。是以福慈岳常雪不レ得二登臨一。其筑波岳、往集歌舞飲喫。至二于今一不レ絶也。

とある。乃ち筑波神のホスピタリチーには、祖神尊も、轉た祝福するを禁じ得なかつた。

何れにしても筑波山は、關東に於ける民俗の、崇拜の標的となつてゐた。單に崇拜ばかりでなく、男女相愛の標的として。

四　筑波と隆光僧正

中古以來は、兩部習合にて、筑波大觀現と稱した。中興の初祖には、慶長時代の宥俊を擧げねばならぬ。三世榮增の時、三代將軍家光山上兩本殿、攝社四社を建築し、本堂、五重塔、鐘樓、樓門等、何れも輪奐の美を極めたと云ふが、今は悉く破却し去りて、見る影さへもない。

而して其の繁昌を極めたのは、十一世隆光大僧正の時であらう。彼は綱吉及び其母桂昌院の歸依僧にして、實に護持院の創立者だ。彼れ隆光が江戸より筑波に赴く

際に、如何に仰山であつたかは、その日記が之を證明してゐる。

二十九日〔寶永二乙酉年九月〕被レ爲レ召、登城、於ニ御休息一、御目見、今度筑波へ罷越候に付、御藥被レ下レ之。豐心丹、延齡丹、濟生丹、蘇香圓、龍腦丸、振藥、打身藥、人參五十本、……明日御用有レ之候條、五ツ半〔午前九時〕登城可レ仕之旨被ニ申渡一、明日筑波へ御暇被レ下筈也。

朔日　月並之御禮如レ常……愚は御禮過、於ニ御白書院一、御暇被レ下レ之。先御次へ御老中御出、今日筑波へ御暇被レ下に付、拜領物被ニ仰付一之旨、被ニ申渡一。次に御前へ罷出、御暇被ニ下置一、拜領物被ニ仰付一、難レ有奉レ存之旨御禮申上。御次へ引退、公方樣入御之後、拜領物時服十、銀百枚、御白書院下段、御敷居之內に並べ置、御老中列座にて罷出、頂ニ戴之一、退散。次に於ニ御休息一、御手より伽羅一本被レ下レ之、黃金十枚、旅硯一箱被ニ下置一。次に御茶壺被レ下レ之。……

四日　爲ニ御暇乞一、九ツ時〔正午〕登城、於ニ御休息所一、御目見。御菓子被レ下レ之。御懇意之上意也。於ニ土圭之間一、三宅備前守人二十人、馬十五疋之御朱印被ニ相渡一。八ツ時〔午後二時〕退出。

如何に德川時代の、呑氣な旅行でも、江戸から筑波へは、途中一泊すれば、優に到著出來るもの。然るに斯く迄鄭重の送別は、以て當時隆光の勢力を卜するに足る。

斯くて隆光は、五日の午前四時前出發、一行は人數百二十人、外に人足五十人餘、馬二十疋である。而して翌六日八つ半時〔午後三時〕筑波に到著した。隆光も我等同樣、頗る雨に苦しめられた樣だ。但だ九日には、

今日迄不ニ快晴一、雨止氣色無レ之。依レ之本尊鎭守へ祈誓、不思議之方便にて今得ニ快晴一。

とある。其の方便とは何ぞ、聞かまほし。

斯くて彼は十日には歸途に就き、十二日江戸に著、十三日には登城して、將軍綱

吉に御目見してゐる。然るに今や隆光の筑波に於ける、宿坊知足院趾を尋ねんとするも、只だ僅かに庭石の數個と、池の埋め殘りが、三四坪を剩すのみだ。時は實に一大革命者である。

五　小田城と北畠親房

歸途雨未だ止まず、我等は筑波の諸有志に別れ、小田驛に下車し、小泉小田村長、中島小學校長に迎へられ、直ちにその案内にて、鐵道線路を横ぎり、小田城址を見る可く赴いた。

小田は元來三村卿と稱した。八田知家の住地だ。知家は義朝の子にして、頼朝とは兄弟であるが、彼は其母八田局の懐姙の七月に、宇都宮彌三郎知綱に嫁したから、八田氏を名乘り、而して常陸小田に住したから、其子知重に至りて、小田氏を稱した。斯くて小田氏は、鎌倉、足利を經て、元龜天正の頃に至る迄、關東名族の一で有た。

小田城址は、方五町許、尚ほ壘郭の趣を存してゐる。其の塹濠は今や田となりて、簑笠の男女、頻りに植付最中だ。而して其の本丸の跡と覺ゆる小高き地に、恐らくは北畠親房卿をも見たらんと覺ゆる大欅がある。其の幹の大、以て牛を掩ふに足り、其の技葉の繁茂、以て其下に百人を立たしめて、餘りある可し。

小田城の北畠親房卿とは、離る可らざる干係がある。

延元三年九月　北畠親房等常陸東條浦漂著。

十月　小田城に入る。小田治久等附近の諸豪と共に之を迎ふ。

延元四年　親房小田城にて、神皇正統記を著はす。

興國二年　親房職原抄を著はす。

五月二十二日　高師冬の兵、小田城に迫る。

此頃興良親王親房に迎へられ、小田城に入り給ふ。

六月十五日　師冬寶篋山に登り陣す。

九月　この頃、小田城主治久異心あり、師冬に通ぜんとす。

十一月十日　治久敵兵を導いて城に入る。

同日　親房關城に移る。

以上の極めて乾燥なる目錄を見ても、如何に蒼茫千古の情が、此の廢壘、殘濠の間に漂ひつゝあるかを、知る可しだ。

親房は自から正統記の末に跋して曰く、

此記者去延元四年秋、爲レ示二或童蒙一、所レ馳二老筆一也。旅宿之間、不レ蓄二一卷之文書一、纔尋二得最略皇代記一、任二彼篇目一粗勒二子細一了。

と。然も正統記は、日本に於ける唯一無二の史論だ。白石も、山陽も、著者に向ては、唯だ讃嘆あるのみ。彼は南朝の忠臣のみでなく、日本に於ける、舍人親王に次ぐ史家であり、又た史界の恩人である。彼は此書は、或る童蒙の爲めと云うたが、そは謙辭であつて、彼が南朝の爲めに、一大氣焔を吐きたる檄文と云ふも、不可あるまい。

今年（延元四年）北畠大納言親房卿、神皇正統記五卷を作りて、常陸國より吉野へ献ず。（櫻雲記）

とあるは、信ず可きに庶幾し。

興國二年　新帝（後村上天皇）吉野を帝都とすと云共、行宮殿閣なく、月卿雲客微少、昇進除目殆斷絶せんとす。こゝに於て是二月下旬源親房、常陸小田城に居りて、職原抄二卷を作て、吉野へ献じ奉る。百官諸位職、掌を指が如し。末代に至て、帝都の龜鑑と云つ可し。親房博識才學あり、今東國に在て、文書の一卷も不レ從して、輙く是を著す。只凡人の所作にあらず。（同上）

如何にも其通りだ。

六　極樂寺

小田城址を見て、此れから極樂寺の跡を探る可く出掛けた。我等は小田の村中を

横ぎり、野徑を寶篋山麓に向て行く。此邊店屋などの小字がある。昔時附近部落の人々が、此邊に所用をたしに集ひたる所であらう。又た大町、西町、今宿、荒宿などと、其の名稱が、自から此の地方の歴史を、物語りてゐる樣に思はるゝものがある。

小泉村長は足駄にて、先導する。予は坊主濕れに濕れて、その次に行く。雨は降る、道は愈よ狹くなる。されど寶篋山は、海拔二千五百尺と云ふが、其の山容は實に溫雅で、秀潤で、其の一帶の前景、美人の笑渦の如く、ふくらみある小山には、何れも翠松生ひ茂り、何となく圓山應擧の畫きたる風情がある。實を云へば、とても關東方面の荒くれたる山水とは、同一視し難い。

予は小泉村長に、斯る光景は、甚だ無躾なる申分ながら、此邊に措くは、いと惜しき心地がする。何たる風流の山であらうと云へば、小泉村長は、此山には松茸が多く採れると答へた。

道傍の田の中に、大なる枯株がある。此れは小田の大樟とて、城跡の欅よりも、數層大きかつたが、大正二年に枯死したと云ふ。やがて石の地藏がある。背面の石諸共に、同一石にて雕刻せられたもの。如何にも古色がある。溝に架けたる細長き石は、普通の石ではない。小泉村長に聞けば、果して其の裏には殺生禁斷の文句があり、他の一は、君の庭中に保存せられてゐると云ふ。畦徑と藪の間に埋積したる瓦礫の中には、果然鞆紋の瓦を見出した。少くとも、鎌倉時代であらう。地名は尼寺入と云ふ。問はずして身は已に極樂寺の境内にあるを知る。附近の田には植付が濟んで、既に田草を取りてゐる。予等は早や寶篋山南麓に達した。而して八田知家の墓と稱する五輪塔は、彼方の藪の内に隱見してゐる。

小泉村長は、道が無いと云ふ。田草を取りつゝある農人は、有ると云ふ。さらば案内をと乞ひて、其後に從ひ、雨中の藪くゞりと出掛け、漸く其塔に達したが、餘りに新らしくて、聊か失望した。其の樣式から見ても、せいぐ〳〵德川初期のも

のであらう。或は中期と云ふも差支あるまい。

されど予は決して悔いない。塔は新しいが、風景は古くある。其の滴る如き山には、千年内外の色が染め附けられてゐる。而して案内の農人より、昨日田の中から拾うたと云ふ、一枚の瓦を讓られた。それには三村山、清冷院の字が、明かに陽出してゐる。

七　八田知家寄進の古鐘

小田の見物を濟まして、再び汽車にて土浦に至つた。筑波鐵道は、今や土浦から岩瀬迄、約二十五哩の私線にして、土浦水戸線と、下館水戸線とを、聯絡してゐる。卽ち兩省線を階子の双柱として、此の私線は、その間に一段を架してゐる。主要の貨物は、茨城縣名物の石材だ。然も客は概して筑波山を焦點として、吸引せられてゐる。特に筑波山に鋼索鐵道出來後、非常なる增加だ。筑波山は今や關東のみならず、亦た全國的に宣傳せられてゐる。夏期には講習會とか、林間學校とか、盛んに流行してゐる。斯る盛況は、筑波を詠じたる萬葉歌人達も、思ひ及ばなかつたとであらう。

我等は出車時刻前三十分を利用して、土浦等覺寺に赴き、小田極樂寺の鐘を見た。此れは頃ろ國寶となつたと云ふ。我等は鐘銘を讀む可く、蹈臺を借り來り、更らに階子を借り來り、鼻を鐘の膚にすり附くる程、接近して見たが、遺憾ながら鐘銘を、故らに磨り潰してあるから、とても讀むとが出來なかつた。

但だ『鑄顯　極樂寺』の五字と『建□　筑後入道尊念』の七字だけが讀めた。恐らくは建保であらう。筑後入道尊念は、云ふ迄もなく八田知家だ。彼は小田氏の祖先にして、建保六年三月三日、七十五歲にて逝いた。彼は常陸の守護職にして、晩に薙髮し尊念と稱した。賴朝の死後、賴家の時に、北條時政、大江廣元等と、鎌倉の政治に參與したるとは、東鑑に記載せられた通りだ。

惟ふに此鐘は知家が晩年、其の菩提寺たる、三村山清冷院極樂寺に、鑄りて寄進

したるものであらう。それが如何なる因由にて、土浦の等覺寺に來たか、其の來歷は判知らない。但だ其鐘銘を故らに磨り潰したのは、所有權に關する爭論の爲め乎、若しくは爭論の端を防ぐ爲め乎、扨も情けなきことよ。

歸途は雨又風。東京に還れば全く荒れ模樣だ。大森の山王草堂に著したのは、午後九時前であつた。一日の遊、筑波にては、雲霧に妨げられたが、小田に於ては、得る所少くなかつた。特に平生尊崇する、北畠親房の神皇正統記や、職原抄を著したる、小田城址を見るを得たのは、予に於ては、無上の清福であつた。

（大正十五年七月）

房州二日記

一　保田と日本寺

曾て梁川星巖の浪淘集を讀み、總房の遊を思ひ立つたと、幾回なるを知らず。過般一夜泊りにて、先づ房州だけ一巡す可しと、修史室の高橋君と申合せ、既に前週出發せんとしたが、雨にて果さず。今度の日曜も、曇り、小雨、愈よ梅雨の候に入る抔、天氣豫報にて嚇されたが、今度此節は雨が降つても、雪が降つても、行くと決心し、雨裝して出掛けたのは、大正十五年六月二十日、午前四時半であつた。大森から東京は、川中島合戰同樣、全く大霧の中に鎖されてゐた。

我等は東廻りの六時十分發の汽車に乘るつもりであつたが、兩國停車場に達すれば、方さに五時卅分の西廻り汽車の發せんとする、刹那であつたから、直ちに之に飛び乘つた。此にて約四十分を贏けた。

天氣は怪しかつたが、保田に下車する頃は、かん〳〵照り出した。予は明治二十年の夏、數日を保田に暮らした。當時宿屋では、風呂桶を、街道の脇に持ち出して、我等は入浴したることを記憶す。

先づ鋸山の半腹なる乾坤山日本寺に詣した。途中の茶店では、阪路が險阻だから、上衣を脱いで預け置けなどと云うたが、思の外樂であつた。鋸山は鋸の齒の如く、海に向つて立つてゐる。山は概ね凝灰岩か、若しくは沙岩らしく見受けた。山中には鶯が啼いてゐた。道傍には虎の尾が咲いてゐた。堂は荒れ、且つ傾いてゐる。丹色に塗りたる柱や扉は、半は剝げてゐる。轉じて本坊に赴けば、近頃ろ修繕したものと覺え、茅屋根は新しくある。亞鉛葺とせぬだけが、先づ仕合であらう。

庭には梅子が、半ば黄く熟してゐる。偶ま鐘樓に立ち寄りて、鐘を見れば、何らん古色がある。銘を讀めば、

下野州佐野庄堀籠郷、廣龍山天寶禪寺、住持沙門、大朴玄淳

云々とあり。末尾には、

大工甲斐權守卜部助光

沙門行珂、沙彌道密

元亨元年辛酉十二月　日

とある。此れは何時頃に、此處に持ち來つたのか、兎に角名鐘だ。

我等は鐘樓の側、沙羅双樹の下にて、高橋君の携へたる魔法瓶から、一杯の番茶を喫した。幽邃と云ふ程ではないが、本坊の背後には、巨岩數笏天を衝いてゐる。その下には竹林繁茂してゐる。

一氣飛び下りて停車場に到れば、尚ほ三十分を剩ます。世上に評判高き石原純博士の住宅は、何處にやと聞けば、驛長が自から先に立つて案内して呉れた。町外れの小學校の附近なる丘陵に據る、赤瓦の棟がそれであると、指し示した。その隣

家の日本屋は、畫家山内多門氏の宅と云ふ。

石原博士の邸内からの眺望は、尤も佳と云ふことにて、一寸立ち寄りたかつたが、驛長が頻りに腕時計を見るから、詮方なく、その外垣の下を迂廻して、間道を取りて、全速力にて停車場に還つた。

驛長は頻りに高橋君と、ひそ〳〵話をしてゐた。後にて聞けば、拙筆の無心であつた。驛長は必らずしも石原博士宅の案内にて、拙筆を釣らんとした譯ではあるまいが、予は今更ら峻拒す可くもあらず、他日を約して相ひ別れた。斯くて天氣は愈よよくなつた。

二　船形觀音と國分寺

北條に下車したのは、殆んど正午頃であつた。それから自動車で、船形町に戻り、船形觀音に詣した。山の半腹に、沙岩を穿ち、朱欄丹閣を、嵌してゐる。大袈裟に云へば、大同雲崗寺の規模を、極めて縮めたものだ。但だ大同のは石佛であるが、此處の觀音樣は、正體は拜まなかつた。

此處からの鏡浦の展望は、何とも云ひ難きものがあつた。支那杭州の吳山第一峰雖も、雲霧全く拂れず、されば波上の富士を望むことは出來なかつた。然も幾多の雲鬟霧髻は、烟波縹渺の間に出沒し、坐ろに詩情を煽つたが、本文を草する迄は、未だ句を成すに至らなかつた。

那古觀音も、亦た船形同樣、山腹にありて、鏡浦に面してゐる。我等は此處の茶店にて、携へ來れるサンドウィッチを喫した。而して其の殘餘は、鳩に馳走した。

船形よりの途中にて、餘り枇杷が美しかつたから、之を購うたが、二十錢にて、二人分に餘つた。

此れから府中に至り、寶珠院を訪うた。府中は安房國府の所在地だ。寶珠院は、舊幕時代には、二百三石九斗餘の寺領を有したと云ひ、其の山門の入口は、堂々

たる並樹が連つてゐる。されど大正十二年の震災の爲めにや、今は只だ礎石のみにて、巨大なる梁や棟材が、その邊に横はりてゐる。而して仁王尊なども、兩脚を折られたる儘、雨暴らしになつてゐる。

此れから國分寺を訪うたが、規模は小國だけに小である。礎石は若干藪の内に殘りてゐたが、蛇を突き出す虞があつたから、餘り深入しなかつた。布目瓦片や、紋様瓦片の、二三枚を獲て還らんとするや、堂寺の中婆が、三義人の墓ありと案内して呉れた。墓は國分寺入口の傍なる墓地に三個駢立してゐる。

正德元辛卯天十一月廿六日　萬法院脫叟道解居士靈　園村　根本五右衞門

正德元辛卯天十一月廿六日　銀秀院一法常感居士靈　湊村　秋山角左右衞門

正德元辛卯天十一月廿六日　貞信院劒室道霜居士靈　當所　飯田長次郎

而して何れも其の石塔の左の下隅に、萬石中總供養と彫りてある。

此れは萬石騒動とて、德川時代に有名なる事件の名殘だ。卽ち安房に於ける一萬石餘の領主、屋代越中守の用人川井藤左衞門が、苛斂誅求を事とし、此れが爲めに萬石村の百姓等六百餘人、簑、笠を著け、屋代家の門前に詰め寄せ、其の結果、首謀者として右の三人は國分村萱野が芝にて死刑となつた。然も百姓共の訴訟は、最後の勝を制し、藤左衞門父子は、其の罪科によりて討首、其の下役の惡吏等も、

それ〴〵處分せられた。而して三人の義民は、今に至る迄、香火が絶えない。

三　國分寺より白濱

國分寺から、高橋君は、大莊嚴寺に赴き、弘安九年の古鐘を見んと云ふから、自動車を捨てゝ、村徑を通り、その寺に赴けば、大莊嚴寺ではなく、大嚴院だ。鐘樓に近寄り、鐘を見れば、無銘である。高橋君は故らに階子迄も借り來りて、手にて鐘の膚を撫で見るも、一字も無い。和尚に聞けば、此處の鐘は元來無銘の鐘とて、有名であると空嘯いてゐる。大莊嚴寺などとは名さへも知らぬと云ふ。高橋君は、吉田東伍氏の地名字書を案内者とした譯だが、扨ては何かの間違であらう。

此れから館山公園に赴いたが、そこは唯だ海岸の小高き松や櫻の林にて、三四の子守の村娘等が、櫻實を喫し、唇を紫にしてゐるところであつた。

斯くて内房より外房に出づ可く、神戸村を經て、安房神社鳥居の前に出でた。神戸は北條から二里十四町、西は平砂浦を隔てゝ、伊豆七島を望み、北東南の三面は、山にて圍ひ、正に是れ天然の溫室にて、促成野菜の名所だ。

總じて云へば、神戸に限らず、安房其物が、天然の一大溫室だ。沿道の洋葵なども、寒中もその儘と覺えて、三尺から五尺位のものもある。而して其花眞紅、火の如く、眼を射つてゐる。其他花畑が、各所にある。此れは固より東京へ出す爲めのものであらう。乃ち日葵草の如き、今や人よりも高く、既に其の大輪の花を開いてゐる。

安房神社は、當國一の宮にて、官幣大社だ。然も社内は一千坪に滿たず、背景には松山あれども、社格に比して、規模頗る小。

此れから外房だ。卽ち太平洋に面して行く。空合の模樣、遠望は叶はざるも、亂礁起伏、海岸の眺めは、尤も妙。聞く布良方面は、十二年の震災にて、地面突起、一丈餘。今や少しく復舊しつゝありと。逗子、葉山邊で、六尺内外の突起と云

へば、左もありなん。饒口詩人星巖は、布良脯を賞して、その詩を作つてゐるが、今猶ほ古の如きであらう。

我等は此儘一氣直に鴨川迄赴かんとも思うたが。寧ろ海鄉の氣分を味ふには、僻所が可ならんと考へ、白濱村の岩目館に投宿したのは、二十日午後四時頃であつた。

五　白濱

白濱は房州の最南端だ。里見氏發祥の地だ。安房に於ける里見氏の始祖義實は、三浦から此濱に到著、若しくは漂著した、此れが嘉吉元年二月だ。安房は元來安西、丸〔麻呂〕神餘、東條四家に分屬した。義實は旅烏でありながら、四家の鬪爭に乘じて、巧みに安房を併合し、延いて兩總に及んだ。

岩目館の二階から眺れば、其下は蜀黍が既に五尺も延びてゐる。その先は一面、芋々たる草原である。白牛やら、黑牛やら、鳶色牛やら、斑牛やら、點々、或は起ち、或は臥してゐる。その先は岩礁が起伏してゐる。漁舟が横つてゐる。而してその突端が白塔の聳つたのが、野島崎の燈臺だ。

我等は旅館に著するや否や、先づ燈臺の附近まで出掛けた。此邊も地層突起の痕が、歷々だ。數年前迄は、水中に沒してゐた牡蠣殼の付きたる巨岩などが、今は陸上に横つてゐる。聞けば野島は、本來島であつたが、元祿十六年の大地震、大海嘯にて、陸地と連接するに到つたと云ふ。或は然らむ。

里見義實以前、源頼朝も、亦た石橋山敗戰後、此處に到つたと云ふ。此れは治承四年九月十一日の事。而して燈臺より程近き辨天祠の腰掛松は、頼朝の腰掛けたる跡にて、海濱巨巖の上にある銚子池、盃の池は、何れも頼朝の銚子と、盃とが、化したものとの傳說がある。何れにしても頼朝は、眞鶴岬より內房に渡り、外房の沿岸を經て、總州に出でたものであらう。

我等は海岸の巖石の間を彷徨し、太平洋から多量のオゾンを持ち來る風に、面を

吹かしめ、殆んど自己催眠の境に入らんとした。偶まその邊に、五六の海女が、半裸體の儘、焚火を圍み、圓座してゐる。近き見れば、取りたての鮑を、火中に投じて、燒きつゝある。海女はお客さん、一つ召上れと、頻りに馳走した。如何にも美味だ。更らに又た一つを喫した。海女達の澁團扇然たる顏面、その赤銅色の皮膚、其の大く逞ましき四肢、其の蹲踞して、傍若無人に談笑しつゝある風體、只だそれを見物する丈にても、此の一日を消費する價値ありと思うた。

轉じて里見義實の墓を訪うた。此れは山手にある。見渡せば、田植最中、殆んど一人の男子がない。俚謠に、

房州よいとこ、〇〇〇〇、男ごしよらく、寢てくらす。

とある。男も必らずしも、寢てくらすのみであるまい。鰹を釣るも、鮪を突くも、皆な男の仕事であらう。されど予が房州に入りて、尤も眼に著たのは、牛と女の多きことだ。而して殊に女の勞働することだ。

三峰山杖珠院の裏の小高き所に、『杖珠院殿建室興公大居士尊儀』と彫りたる石塔がある。此れが里見義實の墓だ。されど此れは、明和八年辛卯正月の建立にて、その後に小なる五輪塔の、半ば壞れたるのが、眞の墓であらう。

歸途には弘法の芋井を見物せずやと、宿の若主人は誘うたが、既に七時も近ければ、御免を被つた。此れは數莖の大芋、涌泉中に生じ、綠葉繁茂、四時凋落せぬ奇瑞がある。乃ち弘法大師加持の餘澤だと云ふ。恐らくは是亦た氣候溫暖の然らしむる所歟。

五　外房と內房

房州は殆んど總ての點に於て、對岸の相模と、關係を持つてゐる。其の地質の如きも、我等素人の目には、逗子葉山から、秋谷三崎方面と、如何にも類似してゐるかの如く見受けらる。植物の如きも、亦た同樣だ。恐らくは太古は、地續きであり、何時の間にやら、陷沒して、東京灣の入口は出來たのではあるまい乎。

そは兎も角も里見氏の盛時には、其の防備は專ら内房の沿岸であつた。此れは相模、若しくは武藏からの敵兵が、海を渡りて來り侵すに備へたものであらう。而して其の外房一帶の向岸は、亞米利加なれば、當時に於ては、まさかそれを慮る必要は、無かつたであらう。されば里見義實が、外房の白濱城から、内房の稻村城に移つたのも、又た里見義頼が、館山城を築いたのも、里見義弘が、岡本城を築いたのも、自から理由がある。

加之里見氏が、小田原北條氏に備ふる水軍の施設も、亦た見る可きものがあつた。乃ち鋸山の突端、明金岬や、船形觀音の西半里大房岬――一に大武岬に作る――や、又は洲崎やらに、望樓を設け、恒に敵の來寇に備へたるが如き、用意尤も周到なるものがあつた。

物は必要から生ず。日本に海軍の振はなかつた所以は、必竟其の必要無かつた爲めだ。然も安房の里見氏や、若しくは四國の土居、得能氏や、苟も其の必要ある地點に在るものは、必らずそれ〳〵相當の設備は爲してゐる。予は安房の古城址や、望樓の跡を見て、實に其の然る可き所以を覺えた。

白濱村は半漁半農の村だ。昨日は其長さ九尺、其の重量四十八貫目の、大鮪が揚つたと云ふ。乃ち日本の大男出羽ヶ岳よりも、丈に於ても、量に於ても、超越してゐる。

我等は靜かなる一夜を暮らした。訪問者もなければ、又た附近に騷ぐ者もない。旅行此の如くんば、實に樂行だ。乃ち午後八時より就床、熟睡翌朝四時に至つた。

六月廿一日、起き出づれば、天半は曇るも、雨の心配は無い。梅雨中では、是亦た好天氣の部であらう。今日は自動車旅行のつもりにて、正七時に白濱を發し、外房沿岸を快駛した。

六　白濱より天津

六月廿一日、午前七時新濱から乙濱を經、外房の沿岸を快駛した。途中の光景は、

左の二十八字にて、略ぼ領取せらるゝ。

峭壁危礁當面遮。　汀灣曲曲幾人家。
房南六月海風好。　一路吹薰百合花。

滿山見るとして、山百合の花盛り。青薄の叢から、白き花朶が、海風にゆらゆらと搖く風情は、眞に人を惱殺するものがある。

千倉から鐵道線路に併行して、鴨川に至つた。此れは西廻りの汽車が、北條から房州を横斷して、此處に出でたるもの。今や東廻りは、既に勝浦迄達してゐる。而して勝浦と興津間は、卽今工事中だ。されば東廻りと西廻りが、鴨川にて連絡し、玆に房總循環鐵道が出で來るは、近き將來の事であらう。

我等は千倉から、南三原、和田浦、江見、太海に至り、波太島、俗に所謂る仁衞門島に立寄つた。島主平野仁右衞門氏は、三十年前、予と面會し、且つ同甲の由にて、舊知の如く、我等に向て、氣焰を吐いた。房州の名物は、賴朝公と、日蓮上人だ。此島にも賴朝公の隱窟とか、日蓮上人の朝日を拜して、題目を唱へたりと稱する舊跡（或は新跡？）がある。兎も角も平野氏は、此の島主だ。古は北島雪山、長崎灣內の小嶼烏島を占め、自から烏島太守と稱した。仁右衞門氏も亦た、波太島太守だ。予は氏に向て、羨ましき境涯と云うたら、他で思ふ程のことでもないと答へた。或は然らむ。

此處から鴨川を經、辨天島を右に眺め、天津に至つた。鴨川は內房の北條に對する外房の都會だ。今は西廻りの汽車終點だ。安房の地勢、北に大山脈ありて、上總との國界をなしてゐる。而して其の中央から、安房の中央に南走して、安房を中斷してゐる。此れが自然に分水嶺となりて、川は內房と、外房とに分流してゐる。而して小國の爲めに、何れも小川のみだ。その中でも先づ大なるものは、外房の加茂川と、館山灣に注ぐ、內房の湊川だ。鴨川町は加茂川の流域を占めてゐる。

我等は既に天津に著した。正午に近かつたが、此の機會に清澄山に上らんとて、天津から道を迂して、左方に轉じた。

七　清澄寺

清澄山は、天津から六十町と云ふ。途中から自動車を下り、運轉手君と三人にて行く。山中には帝國農科大學の實習林あり。其の樹木に名稱を標記してある。勾配は急でないが、流汗は雨の如くある。

山中には老鶯が啼いてゐる。蟬も鳴いてゐる。回看すれば、老樹の間から、太平洋の海色が、さら〳〵と光つてゐる。身は層峰、疊岳の脊骨の上に在る。安房の如き豆大の國に、斯る深山の氣味があるとは、不思議の樣に覺えた。

如何なる御利益か知らぬが、婦人なども足駄ばきにて、降つて來る者がある。お山は繁昌だ。

寺の門前町とも云ふ可き人家は、宿屋でなければ、建具屋だ。戸や障子の類を造つてゐる。寺は宏壯と云ふではないが、汗の一二合は絞りて、來り詣する程の價値がないでもない。

予は何よりも其の山門の內、廣庭に聳立する老杉、殊に其中の巨大なる二株に向て、禮讃する。其高さ十七丈餘、周圍四丈五尺。先づ國寶として登錄す可きものだ。少くとも日蓮上人よりも以後の齡ではあるまい。予は巨樹に對する每に、巨人に對する心地がする。靈異に對する心地がする。

更らに其より一段上りたる方丈の前庭に、夫婦樟がある。一は其の周圍一丈四尺、他は二丈七尺。とても杉に比す可きではないが、亦た尋常一樣でない。而して其側の鐘樓に、明德時代の古鐘が掛つてゐる。其の文字を讀めば、房州千光山清澄寺は、慈覺大師の草創したる靈地で、其の鐘も久しき以前に破壞した。然るに行脚の僧惠闇が、虛空藏大士參禮の次、大願を發し、徧く衆緣を募りて、此鐘を鑄たとある。而して其銘には、

梵宇繁昌。　國家安康。
檀信有慶。　聖壽無疆。
明德三年壬申八月　日
當寺主　前大僧正法印　大和尙弘賢。檀那源朝臣淸貞。幹緣比丘　明了。
勸緣比丘　惠闇。大工武州塚田道禪。

とある。

惠闇比丘は仕合者だ。若し彼が慶長年間に生れたならば、國家安康の四字の爲めに、淸韓長老同樣、定めて德川家康から、其咎を受けたであらう。

八　淸澄寺と日蓮上人

淸澄山は、必らずしも高山と云ふではない。されど房總の地、忽戸鼻――千倉岬――から、犬吠岬との間、直立三百八十餘米、東西二里に亙る層嶺は、先づ此れより他には無い。然も嘉みす可きは、其の林相の佳さとだ。此れは寛政年間淸澄寺の僧明範が、寺中及び門前の民家を奬勵して、大いに植林に努めしめた結果だ。

淸澄寺は、光仁天皇寶龜二年、不思議法師、行脚して此處に至り、一株の老柏樹を伐りて、虛空藏菩薩の像を彫り、堂を營みて之を安置したるに創まる。又た仁明天皇の承和三年に、慈覺大師が此山に登り、露地を封じ、檀をむすび、本尊求聞持法を修した靈場とも云ふ。承久二年五月には、鎌倉の二位禪尼――平政子――千日講御願ひの件ありて、寶塔及び輪藏の建立あり。藏には大藏四千餘卷を納むと云ふが、恐らくは今日は散逸し去つたものであらう。

惟ふに從來の因緣は、天台宗である可きだが、今日は眞言宗新義派に屬してゐる。何時よりの變移乎。それよりも重大の事は、日蓮上人が、十二歲にして登山、道善房の許にて修學し、十六歲にして出家得度し、而して本尊の靈驗を祈求して、一宗を弘むと、彼の著書に記載ある一件だ。而して日蓮上人註畫讃には、

三十二歳にして、八十八代後深草院の御時、建長五年三月二十八日の朝日に向ひて、掌を合せ、十遍ばかり南無妙法蓮華經の七字を唱へ、午の刻に、清澄寺の諸佛房の持佛堂の、南み面にして、道善房、淨圓房等の大衆、併びに地頭東條左衞門景信等を集めて、念佛無間、禪天魔等の法門をひき合給へば、始は各ふせぎたゝかふと雖も、終には皆な口をとぢ、舌を捲き、座を起ちぬ。其夜景信が計として、寺中を追ひ出しぬ。

とある。要するに寺は天台から眞言に移つたが。其の參詣者は、概して法華宗の徒だ。今日では清澄寺といへば、何れも日蓮上人を聯想せぬ者はない。

安房は日本での小國であるが、兎に角日蓮上人なる、大人物を出しただけの誇りは、十二分に持つてゐる。實に安房ありての日蓮でなく、日蓮ありての安房だ。

九　星巖五月蘇峰二日

天津に還り來つたのは、既に午後一時頃であつた。我等は小湊に到り、鯛の浦を見物せんとしたが、茶店の婆が、只今もお客さんが御還りになりて、今日は鯛はお出ましないとの事であると云うた。側の客はその通りと首肯した。さらば思ひ止る可しとて、中餐の支度を申付け、直ちに誕生寺に赴いた。

誕生寺は小湊にある。日蓮上人が、此地に生れたるを記念する爲めに、建立せられたるもの、別に見る可きものは無い。我等は茶店に腰掛けながら、中食をした。

安積艮齋は、海錯士と與に價を同くすと云うたが、今はそれ程でも無かつた。但だ此處の鰹の刺身と、鮑のふくら煮とは、とても東京では喫しられないと思ふ程、新鮮で、美味であつた。

此れから一氣に自動車を勝浦へ飛ばした。昔のお仙ころがしも、今は山間安全の地に大道出來、隨意に自動車が往來するとなつてゐる。但だ興津から勝浦までは、鐵道線路の工事中にて、自動車上、一上一下、宛も器械體操でもなしつゝある心地がした。

勝浦發の時刻には、未だ半時間餘早かつた。當日は白濱から勝浦迄、途中迂路をなし、彼是六十哩も走つた。房州沿岸の一週は、眞に快適だ。長汀曲浦、往くとして佳ならざるはなし。而して調理は姑らく措き、魚介の美味は、とても山間の旅行とは、同日の論でない。

我等は勝浦を、午後三時八分に發し、兩國に六時四十七分に著した。而して途中より高橋君と相別れ、大森山王草堂に歸著したのは、六月二十一日午後八時頃であつた。

梁川星巖の房州旅行は、天保十二年で、彼はその三月九日、東京を發し、行德まで、佐久間象山や、大沼枕山が送つた。斯くて潮來に至り、鹿島から佐原に入り、銚子港に赴き、九十九里を經、東金、一宮邊を彷徨し、勝浦、興津より外房一帶を過ぎ、布良、洲崎より、內房を遊び、富津より舟にて木更津に渡り、蘇我野を經、行德から舟にて江戸に還つたのは、同年の七月であつた。卽ち足掛け五個月だ。然も我等は其の足跡は星巖に及ばざるも、只だ一泊の旅行にて、房州の概觀を得た。是亦た大正御代の賜であらう。（大正十五年六月）

弘安古鐘の行衞

過般房州二日記――第三――に於て、大莊嚴寺に、弘安の古鐘を尋ねて、其の寺もなく、鐘もなかつたと記したが。今や漸く大莊嚴寺なるものは無きも、その鐘の存在所は、分明した。

それは我等が目指す可き場所は、往訪の大網山大嚴院でなく、豐房の小網寺であつた。惟ふに吉田東伍氏の地名字書に、大網村大莊嚴寺の弘安鐘とあるは、大網と小網との、間違でがなあらう。

安房國の安房郡豐房村の小網寺は、安房國三十四箇所の觀世音第三十二番の靈場として、知られてゐる。古は小網の金剛寺と云うたさうなが、今は單に小網

寺だ。

山中共古翁は、曾て此鐘を手拓し、房州隨一の物と稱し、上帶の雲文、下帶獨鈷文の奇を指點してゐる。文字は陽鑄にて、中に梵文を挿み、頗る面白きものだ。

金剛山　大莊嚴寺

とは、鐘銘の冒頭だ。而して其の末尾には、

弘安九年歲次丙戌　九月十八日

大願主　金剛佛子隆尊
大檀那　矢作助定
大檀那　大田末延
大工　大和權守物部國光

とある。物部國光は、當時關東に於ける名工にて、武相の重なる鐘は、概ね彼の鑄たる所だ。

此鐘は平沙浦から發見せられたものにして、今尙ほ小網寺の觀音堂から下つて、本堂へ行く間の鐘樓に懸つてゐると云ふとだ。

予は自から之を見るの機會を、逸したるを遺憾とし、之を追記して、該地方遊覽の君子に諗ぐ。但だ鐘銘の、金剛山　大莊嚴寺と、現在の小網寺とは、恐らく別であらう。尙ほ識者の垂教を俟つ。（大正十五年九月）

總房遊記

一　東京より佐原

房總と云はずして、總房と云ふは、行程の順序からである。

昭和二年七月十二日、昧爽大森山王草堂を出て、兩國發午前六時五十分發にて、佐原に向ふ。別に何等の目的があるでもない。大體の方針は極つてゐるも、先づ

行き當りばつたりだ。同行四人、妻、兒、予及び修史室の高橋君。
先づ好天氣。過日の雨にて、田も、畠も、何れも欣々然たる色がある。但だ停車時間の長くして、汽車の鈍きには、聊か閉口した。特に成田抔では、別に乘換もせず、待合せもせざるに、十九分も停車した。兩國から佐原まで五十七哩であるに、十時三十分に到着した。正しく三時間と四十分だ。此れでは餘りに呑氣過ぎはしまい乎。
我等は直ちに香取神社に參拜した。而して參天の巨杉の間を低徊し、更らに神社の背面の小高き所から、利根流域から關東の平野一面を展望した。やゝ霞みて、筑波の双峰は、糢糊の間に在つた。
町の有志諸君は、我等を要して、午餐を供にせんとしたが、我等はその好意を謝して、直ちに小舟に乘り込んだ。但だ保勝會の斡旋に、遊覽の便宜を得たるとは、感謝せねばならぬ。

我等は舟中にて、辨當を喫した。船は津の宮を過ぎ、加藤洲を貫いて行く。其の澤國の光景、何となく支那の江南を想はしめた。
加藤洲の邊では、家は何れも水に面して開いてゐる。水面は卽ち道路である。小舟は卽ち双脚である。眞菰の生ひ茂れる中には、何れも青秧の風に戰ぐ田がある。

橋邊垂柳綠毿毿。　澤畔蒲菰青似藍。
茅舍連レ田田接レ水。　依稀風色小江南。

此邊は服部南郭を首として、梁川星巖、其他日本の凡有る大家の詩がある。何れも餘りに文飾に過ぎて、實況とは緣が遠い樣だ。但だ生田精の津の宮を發して、潮來に至る舟中の作に、

樹影沈沈屋欲レ浮。　一洲洲盡又生レ洲。
農家不レ用耕牛力。　垂柳門前各繫レ舟。

はやゝ其實を得てゐる。されど今日では耕牛を小舟に載せて、田植時には、隣村から加勢に來ることさへありと聞く。

二　佐原より銚子

概して下總と常陸とは、利根河を挿んでゐる。而して其の河中の洲である加藤洲は、千葉縣にして、之に對する利根河の北岸潮來は、茨城縣だ。

我等は潮來に上陸した。服部南郭は、江に臨む數百家、倡妓多しと記してゐるが、今は恐らくは昔時の繁華の名殘さへも、見出さないであらう。

從來は奥羽から米を江戸に運ぶには、銚子に入り、銚子から溯りて潮來に抵り。潮來から江戸に輸送したるものなれば、舊幕時代に於て、此地の繁昌したのも、固よりその理由がある。

我等は眞晝中に、眠れる如き潮來の町を過ぎ、長勝寺を訪うた。寺は稻荷山の麓にあり、文治元年右大將頼朝の建立したものと云ふ。此處には國寶の鐘がある。鐘樓に上りて之を觀る。施主は北條高時だ。元德庚午十月一日附にて、鎌倉圓覺寺の淸拙和尙の銘がある。其の銘中には『客船夜泊』の四字が見出さるゝ。此を見れば潮來が鎌倉末期から、南北朝の初期にかけて、要港であり。商船が此地に輻湊したることが證明せらるゝ。

長勝寺は大伽藍ではないが、極めて淸素の禪寺だ。其の庭には大なる榧が累々と子を結んでゐる。胡枝花が咲いてゐる。水盤には金魚がゐる。庭には蘚苔が靑靑としてゐる。我等は方丈の椽側にて、義公や烈公の文書を見た。義公のは詩、漢文書牘、邦文書牘等、何れも立派なる由緒のものだ。烈公のは和歌の懷紙であつた。

此れから大船津に抵り、乘合自動車にて、鹿島に參拜した。人多く車少く、歸途は心配であつたから、要石などを見物するを見合せた。

香取、鹿島兩神社は、利根を挿みて、相ひ對してゐる。何れも日本の武神にて、

此の東國の交通の要衝たる地點を、兩神社が占めつゝあるとは、我が國史の上に、少からざる暗示を與ふるものだ。

我等は再び大船津から舟にて、一氣銚子まで下らんとしたが。風力勁く、小舟葉の如く掀翻せられ、浪は兩舷より打ち込み來りたれば、已むを得ず、小見川から上陸し、自動車にて銚子に向ふととした。晩景青田の中を貫きて、疾駛し、銚子なる琴平山に登りて、故吉田東伍博士の碑を訪ひ、犬吠岬の側なる曉鷄館に著したのは、既に午後七時過ぎであつた。

三　犬吠岬から銚子

犬吠岬畔曉鷄館は、隨分年古りたる海濱旅館だ。但だ別に變化の跡も、進歩の點も見出されない。然も風景は依然佳し。

一浴の後、襟を開いて海に面すれば、風は太平洋上より來る。犬吠燈臺は十九海浬を照らすと云ふ。其下の危礁巉巖の邊に、電光煌々。此れは活動のローケーションにて、身投げの撮影最中とか。其の趣向は、身投げから、幽靈となりて出づるまでのこととか。何れにしても大賑合ひだ。而して十四夜月は、上りて、萬頃の金波を湧かしめ、端なく詩思を催さしめた。

吹レ面　海風生ニ晩涼一。　燈臺百尺燭天長。
潮頭更有ニ氷輪湧一。　萬頃金波入ニ渺茫一。

斯くて七月十二日は、好日として經過した。因つて憶ふ、先年吉田君勿來を拉へて、佐倉に講演に赴き、成田に石川照勤師を訪ひ、佐原に清宮翁を訪ふ。又た曾て野田豁通男、藤島正健、長谷場致堂諸君と相伴うて、銚子なる野田男の別墅に遊んだとがある。然も諸君皆な不歸の客となり、予は獨り傲骨をもて、空しく江湖に孤嘯しつゝある。此を思ひ彼を念へば、感慨轉た禁じ難い。

七月十三日、早起。好天氣。歩して海岸より犬吠燈臺の邊に至る。今日は大潮干にて、銚子の磯巡りと稱して、日未だ出ざるに、燈臺附近には人の山を築いてゐ

る。臨時に葭簀張りの店が出るやら、何やら、宛もお祭り騷ぎだ。

お祭りと申せば、昨日小見川から銚子への途中にても、お神輿と出會した。只今は田の植附けも濟み、一寸農閑であるから、多分その時節を、お祭り日としたのであらう。

我等は來訪の有志諸君と、曉鷄館を辭し、銚子の川口に至り、千人塚の上に立つて形勢を察した。俚諺に『銚子川口てんでん（銘々）しのぎ』と申す通り、實に難場だ。

上からは阪東太郎の利根河の水が打ち出し、下からは太平洋の波濤が推し寄する。而して暗礁、現巖、起伏高低す。その間を巧みに舟をやるとは、決して容易の業ではない。或は川口に築港を計企して、其の巖礁を取り除けんとの說あるも、それでは銚子が保てないからとて、天然の墻壁を、その儘になし置き。川口の外に突堤を斗出せしめ、宛もコロンボ港の型に則らんとする計畫だと云ふ。千人塚は其名の示す如く、漁夫の遭難者を葬りたるもの。其他遭難者の塚は、累々として山をなしてゐる。何事も生命掛けだ。乃ち魚を捉るさへも、生命掛けであらねばならぬ、實物教育を、今や眼前に見た。

四　銚子より白濱

我等は飯沼觀音に參詣し、銚子を發したのは、七月十三日午前九時四十分、途中成東にて大網線に乘り換へ、大網にて上總興津行に乘り換へた。兩所にて約半時間宛も待ち合せた。途中の停車も悠々たるものにて、上總興津には、二時二十分に著した。

二等汽車は、殆んど鐵道省の役人――小役人――たちにて占られてゐた。車中も諸君のはしやぎにて、睡氣を醒した。鐵道大臣が、特別列車にて、巡視旅行をする世の中なれば、鐵道の大小役人達が、汽車を我物顏に占領するのも、先づ辛抱せねばなるまいかと思うた。